

非諧古今集
余全書麻家

911.3

八

古今自語

慕 聽 味 醉 田 亂

林 堂 異 賦 京 東

Handwritten text in a cursive script, likely a transcription of the characters above, written on a separate sheet of paper.

Vertical text on the right side of the top page, possibly a page number or title.

廣田精和編纂
 俳諧在古今集
 東京旭昇堂梓

我意風の發句年
 おける 照句おけり也



其の一や河を批評
 ことば思ふ處も十
 句の初うふおけり
 決る處の精撰も歌
 仙の所合候所も古今
 集の云形り事も是れ
 一々の句をいふこと

廣田精和編纂
俳諧自注古今集
東京旭昇堂梓

我意同の段句年
おけり 融句おけりや

其のや河や批源

そのや思ふ句年十

同の初了不那く

決る片の精撰句歌

山の所合依詩句古今

集の云形り年十是代

一わらう句年十是代

ふき又伊能尚也
阿也了(三)十年
の指を所向(本)
ふそ阿季(本)

明治十六年

五月

等載

此らくと東風や南の行増き
玉串のまゝる糸宮のつね
懐千一分の鉄の物あり
綱とこれ神の市のいさ
りて教と思ひ神のまじ
ちのまじりてまじりて
積雪小連子のまじりて
向ひの村のまじりて
まじりて人別はれり
神折ありてまじりて
かまの月のまじりて
これ糸宮とまじりて
採のまじりて
著てせしる綱籠のまじり
徳二神小法世のまじり
おのく同定のまじり
柄抄井の例のまじり
有るのまじり

石 公 石 公 石 公 石 公 石 公 石 公 石 公 石 公

小金井小石

兄の世で今年も春は橋の乳
為給る起きののりか
巢を有る色を春小風光
辨まりの末まりのり
半中より外まりの中
味もれり給と給るも
枝村のまじり教合のまじり
手繋の御情のまじり
星風も小鷹を好む
糸のまじり
何事も勤と發を換
煤掃ちりて中へ
まじりて
はりくと橋のまじり
汲つて
長膳のまじり
給るまじり

石 公 石 公 石 公 石 公 石 公 石 公 石 公 石 公 石 公

此らくと東風や南の行端より
 至事とともる来宮のつね
 懐中一分の鉄の物ありり
 襦くと水袖の帯のひつとる
 のう教と思ひ袖の裏ひく
 中と宝篋のまゝうしき色
 積雪小連子の芽はまかけて
 向ひの村はまゆりの公家領
 どのと中人別はれる謙のなれ
 羽折あまへいふとまゝく
 如も懐月のまゝおひとせし
 られふ家とまゝしぬか
 採のむれ言獲しして飛ぶやん
 箸てせしとる鯛籠のくち
 徳二神小法進の法の中襟も
 おのく同定うし紙をぬく
 柄抄井の例うし眼とまの軟
 有るのまゝの近の袖と妻

石 公 石 公 石 公 石 公 石 公 石 公 石 公 石 公

生業はらやうの流きし日金敷
 たるか細敷の西流り如宣
 進屋のるふく老の身まはして
 ふとこふもふ対の指春
 曠よりるお敷ち指のはれふ
 拾うてこの申を砂のあまて
 いのうひのあまらうあるま水
 月もりのさのあまらうは
 り流れて曇りかるとぬれた太
 りこふゆるやと北宮の地境
 越よりけるあまらう世の世し
 秋のふ年まらうは生流
 流すも森荒る味枯折赤
 別る袖のあまらう列風
 形ふれてあまらう人目の遠い
 赤言ふけいふ水流つゝあまら
 菫花の流つゝあまらう菫の角
 未だり流るあまらう水菫

香波のあまらうとあまらうぬ煮りぬ
 不うらくとあまらうあまらうの秋 月号
 縁身柳のあまらう流りぬけに種まらて
 婦人あまらうあまらう葉の雪
 おのつゝあまらうあまらうあまらうの色
 菊の造しあまらうあまらうあまらうの色
 南宮と角力をあまらうあまらうあまらうの力足
 何とあまらうあまらうあまらうのり先
 小女あまらうあまらうあまらうあまらうあまらう
 物屋あまらうあまらうあまらうあまらうあまらう
 赤らんとあまらうあまらうあまらうあまらうあまらう
 摘るあまらうあまらうあまらうあまらうあまらう
 櫻のあまらうあまらうあまらうあまらうあまらうあまらう
 以ふあまらうあまらうあまらうあまらうあまらうあまらう
 流るあまらうあまらうあまらうあまらうあまらうあまらう
 子他あまらうあまらうあまらうあまらうあまらうあまらう
 初あまらうあまらうあまらうあまらうあまらうあまらうあまらう
 赤らんとあまらうあまらうあまらうあまらうあまらうあまらう

竹葉の濁るる思を成させ
 かの瀧の森もふりしは
 人操の出来ははれ小なる後
 飾り鞍をよほさつんせ馬
 室木の蒼蒼とわづらふ源
 袴うつ不ぞ膝もかたう
 ちおいと後ばをたむ縁の上
 婦のよもも縁をさしき
 大坂へ着す信たたきつ所
 招のきよまははけし林竹
 若くは源平月の新ふく
 啼く鳥聲を絶の初を来と
 浪人と舟を平常はつされす
 百日法華をもやゆきとら
 中くふさふさくはし河老面
 若ぬきの羅のまのむ清法
 船籠の藤よりけりて花を
 命のきよとてわづらふ花

竹 葉 竹 葉 竹 葉 竹 葉 竹 葉
 竹 葉 竹 葉 竹 葉 竹 葉 竹 葉

上三三

初花の日数保つて咲かぢ 竹葉
 柳もきう柳もすき物 花葉
 竹葉のよもひまなふ息吐て 花葉
 意すくはれぬ人の身もこ 花葉
 冷くともさうさう梅の月 花葉
 色の中より葉をさす新 花葉
 此徳の桿も可成る花のけて 花葉
 生かちと語らんき大和路 花葉
 らも事云ふ夢のちかひも 花葉
 雑俎録の契さつたわぬの 花葉
 けりくはたの雪も晴りのちり 花葉
 礼辭のりさし守かた 花葉
 泥道のりさる草の解きうふ 花葉
 祖父の世よりは縁あつせ 花葉
 詠うてはる子もよのかう 花葉
 心ゆくはる方年暮るはらう 花葉
 状物も極めてしては月 花葉
 中に入らぬ身もさしきぬ 花葉

竹 葉 竹 葉 竹 葉 竹 葉 竹 葉
 竹 葉 竹 葉 竹 葉 竹 葉 竹 葉

枯と君の叶う花びの叶のうら
 小春のうら〜大空のうら〜
 姉さすのうら〜と空の今月桂
 家入の葉の水さ〜と心
 海程のうら〜と心
 此のうら〜と心
 不意と空のうら〜と心
 陽系の袖のうら〜と心
 うら〜と心
 真層のうら〜と心
 二枚のうら〜と心
 流水のうら〜と心
 揺ら〜と心
 か〜と心
 高方〜と心
 舟〜と心
 梅〜と心

重 重

来れやうら〜と心
 月の出を待たうら〜と心
 打きれからうら〜と心
 甲のうら〜と心
 帯のうら〜と心
 折のうら〜と心
 時催のうら〜と心
 日暮のうら〜と心
 小祿のうら〜と心
 虫のうら〜と心
 花のうら〜と心
 何のうら〜と心
 新葉のうら〜と心
 葉のうら〜と心

知 知

成心つゝの鶴のふり入り
 細きまゝの魚のふり
 膳のすか敷射をいするふり
 阿つゝつゝの世下種一
 尾もつゝのひさし海氣の神さ
 時をきつゝの石の洒掃
 舟のつゝの被浴も大工同
 仲人ふつゝのまゆも南橋
 年をえをかきつゝのあつゝ
 蛇のあつゝの味さ
 何とれく素直の月杖のあつゝ
 糖ふつゝのまゆも
 栗飯の時よつゝの藤葉うけ
 故産まつゝのまゆも
 茶ふつゝのまゆも
 昨年よつゝのあつゝ
 服のあつゝのまゆも
 羽をふつゝのあつゝ

知川 知川 知川 知川 知川 知川 知川 知川 知川

雪のふり魚をさるゝ日
 東風吹らつゝの雪の晴
 小窓ぬけ清芽をのせ
 ひとよつゝのあつゝ
 門篇のふり出舞ふ
 生法と捨ふれをさるゝ
 屋敷さつゝの命の菜
 好れさつゝのあつゝ
 長合つゝのあつゝ
 数えつゝのあつゝ
 八つゝのあつゝ
 ちり車のはらふ
 壺中ふつゝのあつゝ
 西のふつゝのあつゝ
 帷木編ふつゝのあつゝ
 捨つゝのあつゝ
 花葉の日徳もあつゝ
 ちりつゝのあつゝ

知川 知川 知川 知川 知川 知川 知川 知川 知川

成るの心も物のおうり
 細ききこるる漁のふき
 鴈のすも鞍射をひるふつ
 阿つらら世だ下推し
 尾中らのはらう星海氣の神
 時向をす何る花の酒掃
 亮の初へ旅路も大工の同
 仲人ぶう年をきもあふ南
 年をえをかあつらめあつら
 蛇のあやの癖る姓分
 何とれく素良の月杖の思
 糖少山のまきこまき
 栗飯の時よとの旅葉うけ
 如産まらるるまき花やら
 等ふとよ金らがせもな加
 昨平まへの如く感入花
 眼の雲らほりふ花のひら
 羽をらるる嫁まらてあま

知 川 知 川 知 川 知 川 知 川 知 川 知 川 知 川 知 川 知 川 知

晴うぬるをきりて梅並みの

南庭事のひの暮り紙

意つて桐物化に松新屋

内徳の鳥を叫び来る

さききをおくともなうのふた

塩うら〜塩壺の標木の

老眼鏡かりく〜のてき

人ふふれとて踏ぬきり

西本社と有森の翁と式子町

葉のつぎせ秋の憶ふ

月の海五日るふ〜

た〜んとあう〜

梅上戸の海をの〜

茶漉さるる灰のゆ〜

花の苗甚あふ〜

〜

岩鼻をたの〜

かす〜

〜

〜

〜

〜

上七

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

〜

〜

海花の上〜

〜

あ〜

作〜

〜

意〜

暮〜

向の牡丹〜

吹先〜

骨折〜

高踏〜

曝日〜

約甚〜

暖歳〜

目の能〜

障子〜

〜

〜

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

手おれを拾ひ日初や大根曳 等我
 酒をゆ船のまゝと雨ふ川 招雨
 懸河の絶え旅をふ茶煙ふ小 裁雨
 以つ藤一とる知造ぬ手拭 裁雨
 挿せざる木燭をなき雲の月 裁雨
 春片田のふい出来る松入 雨
 赤豆の後のふれぬ穂登造り 裁雨
 能算とくりし海うらや都 雨
 主のふく水浅く流日記帳 裁雨
 酒もまきこし養生のうらむ 雨
 糸と夢土用五部ゆたふふ小 裁雨
 先登のふりき一反の熟魚 雨
 伊豫ふ二のふりくえの別きき 裁雨
 云来ゆたの塔の雲も川 雨
 物買ふをふく来るも意ん 裁雨
 月も秋意ふいこられけ 雨
 上臈のとれゆりうらぬ足んを 裁雨
 服をぬぬきのまゝとる 裁雨

上九

昔や豆もふくまの枝 春遊
 日のさしぬうらぬの 巾二
 饅頭の仕出し真珠のさし 精知
 一礼をさし上をぬぬり 遊
 不知青と思ふゆらるる月事起 二
 直心結の音も江あらしひ 知
 柿おぼえ懐の子小ねを庭とふ 遊
 雲とて以つゆ可電をらるる 二
 沙通うらうけを起琴の代たて 知
 お化糖の写へ灯の透入なり 遊
 蝶もぬきさめのうちかちひとて 二
 丹波へのゆるる舟のまゝとるし 知
 五物とていふをうらぬ表の袖 遊
 いれ秘言を碎とありせぬ 二
 謀中の考うらむ古き年よりら 知
 大工のふれたる木口をろへる 遊
 月ゆりといふるぬ花のたぐり 二
 貝を世風のまゝとらう小吹 知

高岸外の長束のすきこぶり

草のきりり茶の丁度控して

九腰で皆来清うれほらめふ

地葉をくくつていりすふ

幸ひを告ぐ狐の愛まふら

筆のまづらぬ種小出る状

安道餅のぬくみのうづら

大煮あや女元もね

月鍋はとも蓋草の縁歌

佇豆の温泉のふあふ湯

狭い海次ぬれ、月の廣小海

ちふ来たり、志のこまの冷

浪結てあけ逃、籠の落りけ

ちり合来もいこひし分

志比お合来ゆんを初る魚

鯛す歌りけとをねる上

旭の子のともちほまむと目

魚たり、り信上等四五本

七とほよこれと舞れ董可れ

飛んとして、心の中、の嬌

は免之、木地のゆ縁、目のぼて

不即の用、給もぬ、法ぬ

舟がうて、志は、窟、新法り

余河うら、白の曇、かき月

涼、法、の、く、ら、早き秋面歌

懐ある子、の、強、候、を、う

か、か、と、引、き、り、と、と、ぬ、ま、れ

以、是、好、候、を、水、鏡、吟、出、す

春、月、の、手、色、割、き、針、深、い

湯、の、た、せ、は、ぬ、母、の、た、れ、と

後、村、の、糸、交、成、る、糸、海、清、小

四、走、と、人、中、を、言、ひ、お、け、出

多、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら、あ、ら

白、露、小、月、の、欄、以、く、す、也

うかぬやも猫をおきふこつ位
 まの世に秋の器ハのか敷く
 憂海ハ美しみの能をるひ
 秋深の白を袖より清す
 辨の梅冬のうちから雨を
 さしつと鴨小器をかきぬ
 我々のかくのうやんの魚を
 世間のまゝらんは日めり
 ふつと地まつくやとの松花
 いとよきおぬうと平河や
 ちつとふひとをばは月
 鞋をきくは次給す
 飯建小まうとまふは菜
 いとよきおぬうと平河や
 純一の日刻にれまかきつて
 ちつとふひとをばは月
 ひとまを海之茶のちと初と
 星のあつたの夜ちう花堂

水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水

雪のあつたの夜ちう花堂
 ちつとふひとをばは月
 ひとまを海之茶のちと初と
 星のあつたの夜ちう花堂
 いとよきおぬうと平河や
 飯建小まうとまふは菜
 いとよきおぬうと平河や
 純一の日刻にれまかきつて
 ちつとふひとをばは月
 ひとまを海之茶のちと初と
 星のあつたの夜ちう花堂
 いとよきおぬうと平河や
 飯建小まうとまふは菜
 いとよきおぬうと平河や
 純一の日刻にれまかきつて
 ちつとふひとをばは月
 ひとまを海之茶のちと初と
 星のあつたの夜ちう花堂

水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水

掃子と子の面う色し 蛇色以得
利宜の草の以川土出来栄
う合を流してがらのおこあ
取中い志のふ優う ぬうう
いおらうと枕んのおん物屋
あうか情とまうと水ぬ有
林うらげふ神楽のうさ苦
板と突出あかまわあ釜
地位のつふと家のたてあう
吹矢の麩袋あやうぬれき
研と水をまう後同は月あ膏
源ととまう水のひやか
きううとまう水、の江波果
老はらう起まあううう
ぬ菜ハ持茶ううと世話のぬ
今度来世ハ何物へ七夜
神の外にお世と浦の花せう
いさううとまうとまう

知 湖 知 湖 知 湖 知 湖 知 湖 知 湖 知 湖 知 湖 知 湖 知 湖

月の空と波うを教わろ精のむ 連水
重解くく年ぬうううら色 森盛
教うてお玉酒妻のうんわられて
おとて指す精の飲極をまう
鬼角角とすううと指のぬうう
隣ハいつのうと平きううと精
板と板とこのを玉橋ふ掛うへと
今年しつうえろ推すれの楠
年中の考う折ひくくぬう
あうはの世のぬに君拜情
まうしつうついでと塔と物屋
乳産のくまうとまうけ乾程
のうとまう月小巻せろ梓藤子
あうとまうの管うううと
中ふ下ふれをううの西ふく
古のまう茶の等小や中ふ
まうとまうの推本と花のうらひ
候にまう小あうとぬうひき

水 盛 水 盛 水 盛 水 盛 水 盛 水 盛 水 盛 水 盛 水 盛 水 盛 水 盛

とき日小池水より山足たなく
 娘を昔吸てつらとが
 公事宿小病より起つる小池に
 笑うておれぬ物にや一れひ
 兼毛の髪をのり水一葉の奈原
 埃くおひさる風ら志州より
 造幣の法つぎと出来る方を持
 習ひぬき給ふもよき法みち
 障ふらきそむき六曜より
 欠つらつと甚と十分れ月
 糸合ふ古ひさう片る南力取
 毛んの髪もより小池く
 才附の髪まで知れぬ川出
 と此小池を水の初めより方
 以てくらしつる風らぬ二人車
 水發れくち髪よりつら
 出送入るの事のなげ葉法
 号のまきもちかき神地
 水 谷 水 谷 水 谷 水 谷 水 谷 水 谷 水 谷 水 谷

玉川の能くふちうら
 秀徳や晒布ふかぬの法より 素石
 ときき木のつらふらふら 精知
 籠の鬚鳴らひと解おら来て 石
 とき小向ふき喉つら 石
 とき七ヶ火桶つらくせむき 石
 森せむけのぬき納豆 石
 とき系よりけむ風の然らる 石
 ときつら猫をふき龍冊 石
 猫抱て隣の花折ふら 石
 とき暑くと氣がけらふたり 石
 時法りれ土用の重のとて中ら 石
 とき子の達者をあきらめ試案 石
 とき後の能ひ小餅をぬる月 石
 とき能水いっら一葉の物教 石
 とき福箱の湯のつらきも秋まで 石
 とき曠又着るゆめかきと十徳 石
 とき候かき花と連子をばむらん 石
 とき時してつらき数出 石

山の緑すむ村も、河さか不
買河の流るる勢即ち不
早の稲子伝らるる不
近以はらるるやる
女使ひのさけし
我まの申し
尾張の
府村寺志の
世実の
家の中
頼ひ
米五升
母不
枝と
名

石知石知石知石知石知石知石知石知石知

山にけり月河さか不
るる日
んれ
は
自の
角力
土
鴈
以
粒
差
来
おれ
を
と
後
正

水河水河水河水河水河水河水河水河水河

小葉のしづけりれ時を
 大徳層ふらうま経此所
 株梁の余ふ居てつしと酒
 神祇の灯のしづけり
 氷ふおもしろく不露陽り
 雲の音船つふあうふら音
 昔物とてぬ火振引きさく
 花鞍の蒸をささく後男
 からひも日音ふもれの出音
 月の空すの秋のつとれを
 新浪の早う揺る徳所町
 並洗滌ふ冬ふあうは
 細工場へ居せりる先肥立
 糞のふらうふらうふらう
 穀物除おらうふらう
 春も花の棚ふさう柴
 人いふもあうらう梅名志
 ぬくまかきうの虫のとんち

精 我 精 我 精 我 精 我 精 我 精 我 精 我 精 我

紫舟や紫合つしきふ御 紫石
 志つふふらう初禪の聲 蓮寺
 心曲の函次の隅 堂山島 慈池
 心の中へ膳をぬくふる 五橋
 念絶し白く月の映清して 南
 ひまをうらも粒のすり 古橋
 世ふしはあつ秋を居ていせ 官大
 心の忘せぬ火のがり 石
 魚賣のふらうも知れり 百可
 温泉石の無ふらうは 沈
 拾ふも文を二粒の土用不し
 魚の森荒らむつしき 南
 つまふし幣のがさく 橋
 忙しう飯をせむお子 大
 文命を幕もさるる 橋
 連さへいせふふらう 可
 月曇り浪とのぬき 石
 菜の根ふらうしづけり 可

いとつみよ命詔景人を御して
侍らしむ心す物中
古置を末福するちの九
老年足すする世の物出
あつたふと道に餅餅
根引きれは族りうわ
法とれらる人目ゆるる物
言勝の茶根は法ふは
縁の推うう月法ふら
内の七余雨を思ひき秋
碇うの中ふ身もむり尼
知らぬふりて嵐花は
建ちくは花の海から油中
吹草そりて無造作を
かして無命の物根を
何となくふ世なる
か別のとれらるる
あふあふうとく
あふあふうとく

比栴 南 想 火 石 可 沈 可 石 火 栴 南 今 沈 可 石 火 栴 南

老をうへるるふゆせ麦吟子桂花
晴木中そらふ浦を个雪木南
織物らの積小繪の具の紫藤
梅る昔の採小あふ
寺とて一樹年らるる水の月
最も小若も冷る実の心
湖里の谷風んきう雲南カ
吹り海風の吹く雲は
仙幸も昔とまき片とさき
不意おれと秋のふかり
外のむい御りけりさる
春さうふ勢ふ月の海
境向に舞うる地は境
祝の銘のまきさるる
元ふりぬれは子然の時と守
かひひと緒ら喰つこの柿
初巻面白んをいふれん
畑打はとくうらうら

花 南 木 南 木 南 木 南 木 南 木 南 木 南 木 南 木 南 木 南 木 南 木 南

吾娘のねふ田舎の紙をりて
 例のか匿者、婿某所前
 心ざらぬ物お打の隠世
 身もさかちらふ婿某の親
 葉草の心申し、つる冬に入
 不人の意ねのそねありて偽
 小揚およ送る市花のしつぎ
 西小風のうらみおを後合
 篠中の太くをさる七思ひす
 巧ふり川を唐土の琴
 春の秋月の光りの増なり
 心つ世の竹や玉未化す
 うかき女のみ少りおさきと喃
 繪やかすりゆきれ男おさき
 赤金先ららそのよ心交
 宗昔の糸不紋、惜まぬ
 人の糸の花ふさき満ちぬ
 泉不ちく、岩茶を吹雪

世 南 世 南 世 南 世 南 世 南 世 南 世 南 世 南 世 南 世 南

編笠を履ふつ、ふ知月うれ古 隠兄
 春田の浪り、つゝをぬ 相隠
 為ぬぬ二世を屋おさきおさき
 葉、不世篇おさきおさき
 朴の木の伐くち茶を母の東
 笑つくらふ秋のま、水 隠
 調の起ふふとらるる立世、
 ねとの公事ふち、おさき、
 笑う七世黄へる細のま、
 つらり社歌の初者おさき
 向つき切符級のおさき、
 おさきおさきおさき、
 吹合す嬢の妹の嫁入、
 先ちこひおさきをさ、
 迎ひ先く挑灯雨、
 晴うつふち、
 下京おさき、
 おさきおさき、

世 南 世 南 世 南 世 南 世 南 世 南 世 南 世 南 世 南 世 南 世 南 世 南

暮松小燈物也鳥呼くまし
 葉山もは美似不との垣
 困るれ母も何その果らしき
 ころ若て世をを通は文夜
 采十の鐘鐘動化の鏡を附
 以女れ真のころ猪のさき皮
 かかけ出る非為のころの吹去個
 時向まといて系と義伸ち
 酒れとよまぬゆ折のさき皮
 画刷毛の末研ふりしき
 風多小吟、自なき木の起りも
 穂まらうみ堂草とたうふ
 素合の人の呼くく昔は薩家り
 ころら向まて喋^{シヤク}渡り松
 呼鈴也机のゆりの敷のうも
 草の石もれと花ハ千金
 番柳もつとねくも整き水
 蕨葉平形く山の空海

陰 兄 陰 兄 陰 兄 陰 兄 陰 兄 陰 兄 陰 兄

掃とるる第の先や秋の費 有川
 半をいふつ庭の基東風 木南
 空をれりし世とをれき来れもて
 利る口のまかかろねさう
 乃高穂年うんいなる月の出亦
 大つつういふくあもあも小立
 采きのいゆりうねもあせうち
 きんてから知る 江湖村外
 身よも聲小きせて能教合
 純菰子名らあ坊のとも層
 以糖小をむるく教のゆ法思ひ
 秋の狐の淋しき小形く
 寸切きりの拾ひし雪を拾村鞋
 春う采の中も禁ははら比
 た中法うれ客きふのゆふふ
 秋うあううと出葉あ重者
 中を伸か花のゆふの月あう
 秋うしゆき妻のかハ海空

川 南 川 南 川 南 川 南 川 南 川 南 川 南 川 南

写夫画を夢ふはさすの彼位は
 湯元もいへ八條路へ舟一
 飲喰の費はさす小服もかたは
 女房の女ささうれつひとある
 是れ赤いゝ御茶の思案橋
 法い平橋も括てんせけり
 時回らひらゆる神も時ひらす
 後子さし不講もさゆ
 針立の三平と縁も老きこも結
 尾元船へあり猫の序さる
 才ん多りと結骨舟のうけり
 ちうつとも縁ををれ老る掌
 此秋八條へも出ず小もさ遊
 心くら撰ても合ぬらう市
 深智恵の用さるゝの八條舟
 ちうんきさの今も結さる
 ぬきくを舟り篇うゝ花さる
 鳴り舟のいゝ花のこひす

川 川 川 川 川 川 川 川 川 川 川

赤山芭蕉平舟無
 木舟うせうれとふや夜迄
 老てとふ舟のかたき言
 鮎別の杖筆可くは坂下りて
 兼金の打を辞冥念と音
 子放世は月も君と去ぬ座依
 括りゝ一蕨の露屋ははく
 鈴舌の聲も短くかきうり
 替りつゝ風も石を遠く
 時ハはくゆきれうゝ結成て
 親ちうせれも聲のこゝらへ
 指をれも秋も冬も秋も秋も
 鞠のいゝては夫殿の心買ふ
 出る月もんは通うの夫西面
 結去せれも秋の老きく
 古懐玉の砂も研せぬとに海
 世さうり安ささ含けれも
 ちう中小結れもは花衣
 かたは舟子を舟りかたはふ

五休 公成 有岸 兼金 橋雨 赤雨 雪筒 在石 五休 文海 月夕 九起 五休 糸魚 重箭 梅通 如南

海棠や成るべき六の爲にあり 花 知 樂
 昔の車は流る程の目永まて 精 知 樂
 通一と昔の舞うまをいひ 知 樂
 二つ人昔まふれば月をぬき 知 樂
 実の山りかゝる縮のそよぐ 知 樂
 指の秋をまうるまはひつぎ 知 樂
 枕うつろの心船の出るまを 知 樂
 似と歌とつらふ心のまはひら 知 樂
 之乳糖うまむ換る神の田 知 樂
 竹外もせぬる高日清くれて 知 樂
 蓋しとけうろおぬ蓋瓶 知 樂
 鈍れとまうの舟心若以者 知 樂
 手帳も志るは霧の小雲ひ 知 樂
 川風もぬけ暮れぬるまはひ 知 樂
 合書けや午の法ひし出 知 樂
 障子敷一月と花との友あう 知 樂
 歸る存すらあうのありく 知 樂

ことの業もんいむ味形 相景 号 裁
 物の柄もつ相の形 月 涼 評
 色洗ひ程縁まもへきむ(は) 裁
 雲のいらし小極の雲産 評
 ほきみ来て昔はかま不清の標 裁
 葉も細代やゆりかまもは 評
 ききひ小極をらへの新 柄 裁
 まもは小極牛是しぬまのふら 評
 けうれと昔ををたらせむ西舟坊 裁
 根岸の雲の友初ら流り 評
 今脱くらしとんまな次世の家 裁
 いたひの起るぬ舟のより端 評
 月くらく梓連て能者のまへに 裁
 ともる屏風屋の雲も雲も 評
 も結はふまを西風の波もけ 裁
 美ひれうらの縁置のまらま 評
 小つと出る日敷もまをまのま 裁
 名物の手紙のまをまのま 評

控ぬにぞ病つゝ病入草一童子
能く清ひつゝ葉光つゝ合
働ひまけらぬ日いふたごん
虎ハ傘山山山山山山山山
別道増えんとてぬふの納豆羹
世終つて病ふまゝにさし法
若きとて繁ふ年のけいそと
一流らうけい 懐疑のまゆり
知己の皆々々々々々々々々々
ふふふふ 知つてうゝ 僅る来
月代小支中の空のうゝ
春押さけてささるゝ
縁首の春子 裁山ひやくと
藤起ふひひひひひひひひひ
おら 蛇戸の鈴鳴り けいそ
返車心ゆく 昔の葉をうゝ
平日をうゝをふ 裁不出ひひひ
出陣心籠るゝ葉の葉々々々

我 悔 裁 悔 裁 悔 悔 裁 悔 裁 悔 裁 悔 裁

風を吹のうらひあし月と水 涼花
春は静をつゝ 花葉の虫 五休
物憂に味香の依込り糸入て
ゆゝんぬるふを思ふふと
抱えたり白ふ花のうゝうゝ
植てさへ 意なき難きささの土地
袋くつゝ千人の出拂ふ
何用かあちやうらふ法徳の吟
ふふふふ 喉うらむのうゝうゝ
僧の金堂ふふ 花はさけけい
かゝるゝもなまらぬ妹の振帯
才の程を思へば月小をのうゝ
春あのかさ小かゝる 物春
かゝるゝも程分の程をおろむ宮
只ふふのうゝうゝ 花の世服
木のうゝもまねてひひひ 枝の世
縁の口初るゝうゝ 花のうゝ

休 花 休 花 休 花 休 花 休 花 休 花 休 花 休 花 休 花 休 花

年考の佳事小馬力の鞠抜て

淡中道る市のこい沙汰

ふ自由のれと無利を未語意

共ら後まゝかゝ軸の鬼黄

世活しとふさつとつうけるを延辞

をううう格ふ梅壺のふる市

ゆふこの先きたされく面ふせ

つたハ徳の居る庵下

油繪を心の男よやうとあは人

男世帯ハ上新店ぬり

月ふ子を引きこやうぬらみ

水うら整ふまききう町

宮小談子鶴江境のゆりゆり

掛灯をけて灯をかり小暮る

菓茶ハや終て肥立を待はる

あむた石の先きしをきの村はら

かんとりはる向うのきき花はま

里のゆりゆりかんゆら苗代

も

も

も

も

も

も

も

も

も

も

も

も

も

も

も

も

七十三

伐へら以林の中や杖の風

かけら不逃来る鶴さ雀

朝日の極さ道の葉揃て

く心さふも愚報一りう

楳の鞠ハ口を笑いとさ笑ひ

ゆあうりやをらんぬりささか

離越とたはて仔細の滴の味

初爰自は

水まけの志は狂舟の花のゆき

出て茶ぬ管よ化糖管中

換写つ几の海は時々噴きこひ

つごちのうへや流水の塔

淡らうる月とらひはとあはる

菌ぬすこの途返をけり

榮繪袖の能小臺をばあ各て

ふみらうゝ麻椽は後

適不待ふ花のゆきハ脈挫

をさうもあしと枝の好まふ

素石

さ光

石

雨

石

雨

石

雨

石

雨

石

雨

石

雨

石

雨

石

雨

湖の善なり其の波のつらさ

我すもいづらうあつた

念水味もあつた世の中

甲斐の事もあつた飯喰

いふる木登の徳入豆の出

嫁と噂もあつたいづらう

九菜のすりおひちちの

播法もあつたんは一軒

別産もあつた月のおと

新米すりのひら切に

祝村もあつたあつた

地太木端てもあつた甲斐

流世也と流板拾ふあつた

あつた事もあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

猫もあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

石

南

石

南

石

南

石

南

石

南

石

南

石

南

石

南

石

南

石

龍の川

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

水

堆

水

堆

水

堆

水

堆

水

堆

水

堆

水

堆

水

堆

水

堆

水

堆

水

籠市へ持出すしとのこまへして
後さうじの編み一の徳
柘抄らゆふ葉釜の煮くは
身らうじのしりしり
口の端小かうしり口の乾ひ
夏の間らうじの煮くは
打水のたひぬきうの落す
わーしりしりしりしりしり
此秋のりう角力のとうよ
稲の實のり北近業の
澄如と教とおられぬ日の思
能をるうしりと落す
葉も知まぬむの結は
此のむしりしりしりしり
ゆき之す親世の袖むの
まむしりしりしりしり
雪消りしりしりしりしり
神も能くしりしりしりしり
水 燈 水 燈 水 燈 水 燈 水 燈 水 燈 水 燈 水 燈

神の

葉目とおひふ日初くは
杖笠かきさのりりりり
あはれこころのむしりしり
押水いとの堰のりりり
君あはれむしりしりしり
赤ゆきうしりしりしり
おろろの杜目牛もろろ
まむしりしりしりしり
身まひりしりしりしり
と皮とみりしりしりしり
まむしりしりしりしり
一寸包のりりしりしり
湯入るるるるるるる
庭石のむしりしりしり
ねり急れるるるるる
目茶小のりりしりしり
袋あはれむしりしりしり
水 燈 水 燈 水 燈 水 燈 水 燈 水 燈 水 燈 水 燈 水 燈 水 燈

月より一丸をとりてこのひらひら
 鯉魚を煮る事小ハ一日
 五毛の丁出来て丁法中位
 板をゆしては言ふは神言
 夕は入る時ふらむておぼこ
 秋無小まゆまの先立
 南ふら湯はまを素海は海
 お嬢元とりの小園つり合
 浮彫小金の指輪の座はり
 牡丹の咲くことらぬさ
 中ふ月の出汐のひと風情
 秋まじ流く雲をまひ小
 忙くも燈籠の地の細工
 四霊お出のまはらうは
 二三日のつとまを宜せり
 何れもふらん首い極ま
 四毛もまのまの冠木
 昔はつとまをるる歌

我 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我 我

青雲をぬくもぬきやちりく可
 夢吹ひきく夏の江のり 精知
 五月のをぬくもくまの紀不
 彼方の橋をぬくもまぬ
 夢の時へ身をまのまぬれは
 橋も冬をまのまを自心し
 づんらんを鼻をぬくもまぬ
 志をぬくも命をぬくもまぬ
 けりも夏をぬくも神楽
 流るるまぬくも神袖ひく
 流るるまぬくも神と成りたり
 丹波花御の酒を神言ま
 作るる月のまぬくもまぬ
 不むまぬくも神をまぬ
 僕系山今年の編るもまぬ
 流るる鳥子の中のまぬ
 流る花の唇もまぬ
 流るるまぬくも神言まぬ

水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水

花汲めすつらうちうち交交と
佛子あふぬ葉唯千好
物もあま物かうの初つき
年をやらせと送る画好御
あふくと歌日たれのあひ風
何う唾つてかろはあへす
善あき命嬉しき船うり
欲あふあうり尾まき丸心
初あうり三君も意の下け吉
うけつとさうり川もい重
百葉をさうりさ清る月の重
ま世城ふつく雲もあふはは
中入もゆりうけれる床裡男
あまをさうりさ又も手をさ
わらうりさ回きりほりさの葉割言
持らうりされと推着のたつる
ふはつのもあふりさうりさ書
ぬらみと心ゆけをさ水

水知水知水知水知水知水知水知水知水知水知水知水知

山畑の境屋きりや木藪垣
吹世よりあふ秋のさうり風
はら板をさうりさ欄う月世さ
来かろりさのさうりさうりさ
紫漬の物上合あふ水うけん
あまをれらさき世のさうりさ
高ひも子供あふさうりさあひさ世
空や稲あふは秋のあふさ
用ひあふらうりさあふりさあ
粽のあふさあふりさあふりさ
釣るあふさあふりさあふりさ
川岸のさうりさあふりさあふりさ
手籠もあふさあふりさあふりさ
碁あふりさあふりさあふりさ
世あふりさあふりさあふりさ
巧と法あふりさあふりさあふりさ
歌あふりさあふりさあふりさ
あふりさあふりさあふりさ

栽臨栽臨栽臨栽臨栽臨栽臨栽臨栽臨栽臨栽臨栽臨栽臨栽臨栽臨

花波のすつりぬき支度そ

佛子あふぬ兼唯千好

物も森物かうの彩つき

来をやうせと送る悪御

あふくと歌目たれのおひ風

何々唯つてかうは本へのす

善高き命婦しき船より

欲もハあう尾をき丸心

初らうるま君も意の下け吉

うけつ送る川を以て重

百素をさうて清る月の重

ま世城ふつく雲も出平は流

中入もゆりうけれる床裡男

あをさうて又も手をさ

ゆりうて目きりほるの兼割言

持らうたれと推箱のつる

小川の志あうもさけるお書

ぬらみて心のけを並水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

水

山畑の境屋きりや木藪垣

吹世あうるも秋のま川流

はら板を並へて欄上月はそ

来がうる人のまをさうて

柴漬の物土合ぬる水うけん

あををれらさき光のそんり

高ひも子供ぬまのあひせ

空や稲花も我もあうて

用ひあうらあれんのあうら

完

号

号

号

号

号

号

号

号

思ひつゝ其の子をのむ古くは
 今まはと君とてわし一以友
 兄ははとふ等二世の焼う酒
 草叢とふさぐておろぬ後合
 省しむ志法うれ谷のそれ出さ
 出さぬぬりの世一ひやく
 濕りな指君のち京候う
 其川と繋うと金の出のむき
 約好をえくちあて又も一先
 隠居しとらぬ知者さる
 こと居の住持とて月をえり
 米まれの標きの好きはる小
 中ふ木通のつもの月子屋り
 鴨打れうと立巻とらあち
 此諸の尚書會やておろく孫
 うみとせいのく歌の一首七
 花白おろふは二上の法とら精
 麦のみとらふ此の飛とるか

載 臨 載 臨 載 臨 載 臨 載 臨 載 臨 載 臨 載 臨 載 臨 載 臨 載 臨

最のけの所漱ふらし晴河荒 赤石
 小向をらうと目連きを 楠妻
 今年端空うと怪く是つとて 赤石
 赤石の空紅橋とてい山北
 下秋はうのふと怪らき 穀
 時鐘をうく斗うと技持とらて
 起る片は始終ぬをれ一と
 出灰もも昔も昔婦の志とて
 のみとらふ法ふるす 赤石
 故のまのけつ納涼の半分
 持篇ゆふの世とやむ 赤石
 在廊下流うからふ是後殿七
 秋風一とてき海の帯同
 月暈る秋を鳥のちれ晴
 莞の粒をぬけはせうとく
 ちり出ると后と智へは花さかり
 雲小うはせうと大谷

赤 石 赤 石 赤 石 赤 石 赤 石 赤 石 赤 石 赤 石 赤 石 赤 石 赤 石 赤 石 赤 石 赤 石 赤 石

浮く卯の汁のまきも暮れ道や
 萩の菊は一圃一子の萩
 名
 名公をくそ存るやうれ世帯よて
 美紫うらものまきのにしらへ
 変
 吹くこれ積りのふさるゑん斗り
 変
 やうりく一尾よまをるこまき
 十年八船くく深のひとむし
 石
 麻布のうらさを煮くくし
 南
 大概を利し海舟も着すよまき
 変
 流く物穂を積まきき月
 石
 けり約の積りまきん中ふ
 南
 秋おもあまき一十廿まき廿
 変
 却一あへてつこの運者も括りち
 石
 茶釜まきつくと茶碗のふさき
 南
 くらまの交りまき一の水も流
 変
 染積りまきや花のかけ
 石
 萩のつひおるまかけふまきま
 南
 まきお着せまき萩のまき
 変

萩や王子のまき水も流
 曉南
 名公のまきまき無河まき名
 林南
 吹く鶴の衣をまきふらん
 林南
 まき七伸ぬ萩のうらり
 二子宮
 萩の酒をぬくへふのけてま
 南
 家もまきまらふん萩のま
 曉
 けりまき一のまきを流し物ま
 ち
 くらりまきまき夕まきのけ
 林南
 出ぬひの身のまきをまき
 曉南
 茶好同士のまきまき中
 南
 名公をく切れまきぬまき
 林南
 一日おまきまき木津川
 吉
 二張の月を積分の吹まき
 南
 ぬきまきまきからまき破返
 曉南
 萩のまきまきまきまき
 吉
 まきまきまきまきまき
 林南
 名公のまきのまきまきまき
 曉南
 向ふまきまきまきまき
 南

牡丹の里中妻の名は牡丹の花
華のまはれぬやれぬに
小く見んを藤らしき葉の花
如のとほ梅のつらぬ物
志のふたふたふたふた思ふ
籠の雀をたれ放しけり
正法受ハ人牛つきまて
ひんげの跡をたのころ
花火の先ん念々の米を
風ゆらぐ、白ゆ折く
九月のつらぐの月の影
友直の中へつらぬ新編
鈴虫のやうにまき音のしを
まき音のやうにまき音のしを
水の上の白合さきききき
あなご大らき清のころ
咲花の根をたれぬに
うらぬ田のたき音のしを

仙 友 南 宵 仙 宵 宵 宵 宵 宵 宵 宵 宵 宵 宵 宵 宵 宵

新ひびく今宵の月花を
花小きまきききききき
輪とまききききききき
上のつらぬききききき
まき音のたれぬに
梅のつらぬききききき
石蔵のたれぬに
えんごのつらぬききき
まき音のたれぬに
小きききききききき
去隊のつらぬききき
掃くやうにせききき
月見花のつらぬききき
玉簪のつらぬききき
釣魚を籠の中へたれぬに
心平のつらぬききき
花時計のつらぬききき
初夜の手紙のつらぬきき

友 仙 友 仙 友 仙 友 仙 友 仙 友 仙 友 仙 友 仙 友 仙 友 仙 友

知事の意へ申す事なれど
 知事おぼしき事なれど
 服うつしむに横ふき其後物
 豊田の天乳と標にし小町
 安んじ文のふ文のふ案内
 来りし人といふと川内
 山崎の橋よりあつた汗をか
 山崎の橋よりあつた汗をか
 藤原を取小津に取のあつ
 藤原を取小津に取のあつ
 木山の家のおぼしき事なれど
 藤原を取小津に取のあつ
 入る水波も好しき事なれど
 藤原を取小津に取のあつ
 手拭て天魚の砂を打も
 清く空煙のふりも
 地境の部の花の咲か
 日の入りはを暮う川内

友 仙 友 仙 友 仙 友 仙 友 仙 友 仙 友 仙 友 仙 友 仙

歳の日や海棠つむ植木室
 冬も木も小江もあつた
 藤原を取小津に取のあつ
 猫やあつた服治の標も
 日室中へいふとあつた
 濃指の手のあつた
 三味線織とんと朋年れ
 新深のうらなひのあつた
 好む世をさつたあつた
 中もあつたあつたあつた
 中もあつたあつたあつた
 片側は徳町とあつた寺の額
 七つはあつたあつたあつた
 滞留のあつたあつたあつた
 中もあつたあつたあつた
 中もあつたあつたあつた
 中もあつたあつたあつた

友 仙 友 仙 友 仙 友 仙 友 仙 友 仙 友 仙 友 仙 友 仙

陽空不成と法うぬる新の燈
 知さぬゆり一羽めも拭
 分粉ゆりなく研は絶え免て
 船去り法う比合れまら
 明水空より葉のふきまじわ
 法うて吹子つるすくは紐
 何れを空より吹の老のさせ
 凌面うけてるこは之方
 ひつそくと扇の中す帳の内
 竹木の葉もといふ今ころ
 葉火焚柴小籠月の冷
 先づうすすくはまも細杖束
 中級おぼろも出す鳥小妙り
 ひつゆひの札をき小壁節
 くら盛へかけてゆめめもま敷敷
 不ろりと縁へ天井の燐
 いと志きり吹く法も花の風
 つれもねる身ておぼろ子

知 坡 知 坡 知 坡 知 坡 知 坡 知 坡 知 坡 知 坡 知 坡

法うてやまはけきつるをき末南
 小森田和のぬきまは法を儀
 蓮家の神ろ満を病こひて
 ばふ者ま飾りあひつひ
 吹く水と秋んころる月見初
 掃へ候りのかろる新う月
 みのまふあふ人吹くふ者あま
 吹くまをひては法へ出うける
 究る合婢女とま杖はしら
 桑抱つるまゝゑのかんらん
 玉川の甲ひうきまきまらし時
 風の調子まふいあふる月
 今世まも喉ろく鯉の生れり
 中のありして靴の敷るん
 まうとてま竹ふ雲の袖は法金
 河原のいとと別物風俗
 法うると法を掻きふる花の向
 路法まぬねつるの村のうへ

儀 南 儀 南 儀 南 儀 南 儀 南 儀 南 儀 南 儀 南 儀 南

西条至新原のり

とらうりく節子をかく

五丁洗控の跡にたつ

惟うますとくふの跡

板板のふふ命法船渡世

たししし知れぬの跡

被極の藤へき命の跡

ひいひいしし命の跡

先んじき竹樹をうり

法之入る層の跡

柵灯を括り用きの跡

勢ふけしき赤の跡

級ふきく節向の跡

かき者もす夜をふ

其はしつらうれと

柵の対しき跡

坂うらひ釣籠の跡

ひらまふくと清の

儀

南

儀

南

儀

南

儀

南

儀

南

儀

南

儀

南

儀

南

儀

南

上三十一

初冬のけきやみりぬ

時向る者跡まゝ

試み跡地の大指

昔は若きも跡

水取の跡を

味茶の跡を

今年酒買うも

たぐんとらう

若者まゝの

世の流り

浦州の鐘の音

清きまゝし

等子まゝ

疵死まゝ

史摺の之的

妻をまゝ

何れまゝ

郊の刻

西

木

南

南

南

南

南

南

南

南

南

南

南

南

南

南

南

南

夢も細き一夢のうつくしき
 意ひこりたりみ候うあり
 お後々来給ふ文章も開くれり
 ありふ買へと富のれり
 洗ふより深し難治る平治川
 日のつらひくと然るもちりく
 力のつらしきを宿の州より
 遊小をうしき愛の占ひ
 子を抱え居ると汁の嗜ふと
 雨を知らずと知らぬあり
 隈山くさうともせず月之秋
 海花赤きと花の是の如
 垣壁不龍焼たりうをさく
 研を吹れて元の熱は冷く
 交注の後の好之先つしく
 替りてさきさき留るも此友
 茶ふあり林の赤くの花をう
 おくすぬぬ日はくふむき

山 庭 山 庭 山 庭 山 庭 山 庭 山 庭 山 庭 山 庭 山 庭

上三十一

芳原寺小年おまじ

利根川の水より年々雪けり
 小倉生れり心屋の初意
 如お物をさす事必要に候

曲川 深坪

若くはさきくまに際にはし
 好くはさきくまに際にはし
 兼以て記と日記をやら
 炭をまを好くはさきくまに
 舟のくさうも佐理の自由さ
 惟り着るもあつてはし
 此氣の目えんせうれて出
 とは浦らぬ涙をうらま漏る水
 自のこりも物への却れを
 友類と度きれの重なり候
 近慮知らぬ魚の志つては
 金う壹儲と事なれり
 一物なり一物をよめり
 物教さなきと事なれり
 池を流すく池のさきれり

坪川 坪川 坪川 坪川 坪川 坪川 坪川 坪川 坪川 坪川 坪川 坪川 坪川 坪川 坪川

昔の籠を扇ごうううううう
 何れも持て去る者いれ進
 物方れ小瓶の中を鼻小うけ
 内三傘やや不との面あり
 為人を殺すと念出で出度し
 昔の温泉水にゆき小舟に社
 柱色の着せ道に蛇山の川ら
 寺のちりく達摩意の鐘
 初まにゆき牛意は法光り
 如く鏡をうけううと物む
 月の曇ら面影の店の遠く
 舟の中うきたす小舟の故
 心はまことゆき秋は火社
 川の初川と是の砂法
 花をうて能く編み淋し
 あうりと起て牛のふれむ
 月影の世に物の中の花の雪
 風呂あふと世の毒風

川 坪 川 坪 川 坪 川 坪 川 坪 川 坪 川 坪 川 坪 川 坪

船元旅神燈出巻やまの素
 舟うきひし子近き水耕 一
 解て中乾るぬ海小葉東安と 管
 世にや二度の舟のふり 精
 舟織者七枚の埃を拂小月 古
 名に心川吐を木屏の苗 湖
 命名の長蛇夏虫の等おきれ
 舟入と昔の舟り向せし
 船の舟もまを舟家を放る
 舟り出でゆきと鉄索是と音
 舟に船解はゆき不機中と音
 舟も忘進しやう舟度船
 諸光の舟りも早くんうけ
 基を舟りよふと交うし金
 舟度をおせよんと舟男ふり
 舟度とらううてうん舟度
 舟とせの舟を法今の造り
 舟とらうとせ舟度との舟

古 湖 古 湖 古 湖 古 湖 古 湖 古 湖 古 湖 古 湖 古 湖 古 湖 古 湖

柏葉也袖平初日のひししく
 かしこひししくよきかきぬ
 春柳のふししくふ家若し言
 等なきむきハ言はぬく
 けりゆ一有し志らく脱ぬ
 ころや菘のなすりやのく
 法華經の要はうをかにのみ
 巨唐つゝ梵の撰のうらへ
 出女の膏のあまひ小川うて
 法みのうしう紅の色さ
 板村の鑑時ゆりふ海りふ
 月の時をささし天小辞ふ
 小料理の中三羽今来り
 后の雛と素きくれば
 小伴勢ハ古きと云葉のほり
 身名のちれききしは袖
 世を上下ともふうか水色
 かきす袖の篇のかけらふ

桂花
 精知
 遠字

花字 花字 花字 花字 花字 花字 花字 花字 花字 花字 花字

有晴の憂より雀ははらふ
任ふしうも春のけしう
火勢ふんゆれとらん内
若くはしとをふふの麻
ひけ
淡煙の烟をきくは
枝女許小の推う
意州の冬のもちて
浪目そのまはる
かろふは世と
珠勝も子佐介
月の用さの
降初の水気つふ
丸小一年中ぬる
注ぎ縄をたの
寝眼鏡をひく
花の雪をたひて
雪も甚平

知 笠 宇 湖 笠 知 湖 宇 知 笠 宇 湖 笠 知 湖 宇 知 笠

柏葉也袖年初のひ
雪のふりか
春柳の
雪を
いり
こらや
法華經の
巨唐つ
出女の
法みの
松村の
月の
小料理
右の
小伴勢
世の上
か

花 知 宇 湖 花 知 宇 湖 花 知 宇 湖 花 知 宇 湖 花 知 宇 湖 花 知 宇 湖

為者も朝朝時の海の心
 ねんころしぬ窮のまぬ
 飯打うちいさく服のぬす
 冬の大用子かまくらの空
 坐撃の志らくて過つて又と提
 髪のかみちりも素人のつら
 足指の裏の裏のこゝろを村まみ
 はれ世附家の夏のしつ法
 色小あまやうに裡のはれま
 易の志らくて米北より時
 月東は世道と魂ふはれれ
 ひんくし寺のまは成
 体志つらさ葉子鼻すも牛車
 道狭路のけさ法良のまは
 波うを何とゆいぬ水の味
 唱を志らくて酒能持ん
 税之とある一日のむころも
 殊牛みくろのぬら起菜豆
 知 寺 知 寺 知 寺 知 寺 知 寺 知 寺 知 寺

名もろろねん油のやねる君 寺
 戸屋手くは速の吉法に教 荷
 井方の志らくては法進うて 山
 志らくて魚若のからき是より 山
 籠人と思ふれ法う飛月の法 山
 志らくてかかろきも杖も若く色 山
 替かかん袖味法の味の忘る称 山
 阿の目え一の志らくて日若くも 山
 志らくてわさの隣子孫のぬて 山
 志らくての志らくて思ふ初謝 山
 仕舞ふ志らくてすももも吐色 山
 けう海くうもろろく冷心師 山
 法切て志らくて月こもれは山 山
 新の麻糸の志らくてかた法 山
 中波子藤の志らくてあ方の謝意 山
 向うても志らくてぬれぬ先 山
 志らくて志らくて別荘は志らくて 山
 志らくて志らくて志らくて 山

雪小入る冬の早霜の暗の意
 風は如くうき春の川筋
 為縁よんも安き縁をして
 うき此も春より物も拾ひ
 結篠ふ秋も又は月もたり
 新小ひくく紅葉まき苦
 木倉のむし形も人推の売
 意の嵐の人牛うと比よ
 思はしとおもうてんものも来ら
 ぬぬすまれ一向のうき
 大破と小破の雪のふき
 かいふも静け標花ちる
 友石ふかしくも縁の言
 夢籠ぬ小網此のさやの
 拓ても来ぬ利役は是れ
 雪のふきふくと十五日の
 社家町の門揚立る月と花
 桶小うのせふ物うき山吹

蓮亭 涼坪 之根 亭 坪 亭 坪 亭 坪 亭 坪 亭 坪 亭 坪 亭 坪 亭 坪 亭 坪 亭 坪

美濃の山を越えぬの意の爲に
 此を坂ハナリと云ふなり
 改定後煙ふらりて云ひ出で
 鈴の具は多く屏風縁を
 年の尾の夜に破りし金世
 其の葉のふたの法はぬの
 移すの指織る意の意に
 小舟の怪我の有はるなり
 代案の日の敷通るなり
 何事と云ふなり利はぬなり
 冷しむ中と云ふなり
 極小おくれと云ふなり
 所為小の傍に云ふなり
 中と云ふなり
 神言の云ふなり
 世案の云ふなり
 花の云ふなり
 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

上目

雪小入る等の意の爲に
 風の如く云ふなり
 為縁の云ふなり
 結縁の云ふなり
 新小の云ふなり
 本會の云ふなり
 意の爲の云ふなり
 思はしと云ふなり
 ぬぬの云ふなり
 火破と小破の云ふなり
 山小の云ふなり
 友石小の云ふなり
 喜義の云ふなり
 拓ての云ふなり
 世の云ふなり
 社家の云ふなり
 桶小の云ふなり
 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

小つと雛の河はしゆきふふ
炬の如くを唱ふ雁の
葉舟の白ひを懐く思知は
城后海をうらさふふふ
千景若の是くははははははは
雲もくははははははははは
そらに小舟出たつとつとつと
夢の如くははははははははは
蓮子の志のうらさふふふ
小橋を以て物中をうら
さふふふふふふふふふふ
葉の如くははははははははは
秋を以てははははははははは
もふふふふふふふふふふ
借物を今もうらさふふふ
時もあつたつとつとつと
山の花ははははははははは
跡生もあつたつとつとつと

評松 評松 評松 評松 評松 評松 評松 評松 評松 評松 評松 評松 評松 評松 評松 評松

下五

梅にれ梅をばはははははは
柳のやうな梅のやをば
秋て我朝はははははははは
身の志のうらさふふふ
物に秋は梅の月のを
そらに梅はははははははは
冬合の葉をうらさふふふ
思ふのうらさふふふふ
筆致小舟かつとつとつと
流しつとつとつとつと
舟船もははははははははは
大なる梅はははははははは
暁曇る月小舟のうらさ
さうつとつとつとつと
一海客の如くはははははは
晴うてははははははははは
評松の如くははははははは

評松 評松 評松 評松 評松 評松 評松 評松 評松 評松 評松 評松 評松 評松 評松 評松

ついで来い先さの橋のせしめり
 米屋かやうし〜のぬい
 宋の留小極と金を着〜なり
 尾形のとけけよは占を唱
 不〜の結ぬふ自由の種ひ發
 蕙那ら免〜し海ををつく
 向米南のひつ〜る三三三
 船名も呼もぬ陸路老う
 巻ち起る吹中〜さ武四方
 色を横と旅〜うする
 月代の色もかまらぬ秋の景
 架りかま〜橋のまよふ
 洞初と橋州〜う看る海
 小春の空の蒼ひ〜の船
 か世傳の考〜ふを意別て来て
 本堂小の〜ぬ短を笑ひ出
 ちりふは〜のふも海をこれ
 朝の法〜らまにやうりふらう
 其 其 其 其 其 其 其 其 其 其 其 其 其 其 其 其

紅梅を折るふふ〜るあふか 高水
 春の〜さき小流の松竹 松溪
 湯屋脅と焼し海苔ふ時めきと
 長心好織を誰の番か 水
 自昇る東のかこのやんのつと
 春あふさき世平霧鳴り水
 物並のひ〜くも海〜さ秋の末
 世にお〜やうり船し世〜り
 舟を〜して船〜ひ程のつ法〜り
 内丸船は人舟かくれ
 清い北世の社地の本太ま
 丁度能を〜る向の晴〜り
 是〜まら月を〜しる小時鳥
 心〜りうきさふの免ぬ泡盛
 久〜あう笑うを〜る和歌
 馬小舟か〜るこ船け落さう
 舟のむの法〜り結結其〜里
 辨官〜るをさしゆり中ふ入
 溪 水 溪 水 溪 水 溪 水 溪 水 溪 水 溪 水 溪 水 溪 水 溪 水 溪 水 溪 水

向ふふ

其の清くも不潔くも敬香 ^吉 梅 裡

今来一乃々もむひは 月 裡

別庭あふはく深き妙蓋て 裡

待著世は清くはくさるる 裡

善如らふんて是れ月の清 裡

晴子も清くも冷のなをく 裡

柳經小窓りきつる今年くら 裡

叶敷の離れ程をどく 裡

内庭のたしは物か金はうり 裡

おろおしひも洞さし出ぬ 裡

高ふも花つるもさし使 裡

菊繪の梳のこれりぬる比 裡

川音もひびく月やむむむ 裡

とらふりやうも露の静ら 裡

老のふも折葉茶のうをま 裡

えんまんとすれとにその及ま 裡

咲日も梅もひくも露を清 裡

微きれちり水のひびく 裡

裡 裡 裡 裡 裡 裡 裡 裡 裡 裡 裡 裡 裡 裡 裡

歌入のちてくもしそりかみ
俄料理の種ハいつぬれ 漆并 考
二代目の歌掬もそ居の違事
筆をゆすくると歌よみ 并 考
この余雲身はゆき雲に 考
又つらりと就をこやしと 并 考
口端をぬれぬまをかくられ 考
投重年うらみいつきう 并 考
ひくさ小唄とやいひうきく 考
昔世の里の縁記さなく 并 考
結ぶと辨小少こ更る目 考
懐ひ松子の存きしむ 并 考
初茸のかき汁のぼしと草 考
こけいこのゆるさ物り 并 考
免さ角小九の短いまけり 考
いさふこれを鞠のぼしむ 并 考
是さふ七の先ふふとまぬ七 考
何きよもいふ系連の系 并 考

下冠考風座所奥

下散らとりぬ物りの音越て 旭
漢名張るを借ふ春風 文
只ひとり長衣短衣小魚出して
ひ袖り昔も春風ひきり
清雲のすく月をみよきり
結はひとんねと船の不音
松地へ遊す角力の好を記
替りし歌よみ謀の記さの
檣櫓の信交せしむ物思ひ
馬と意平はれれきり
深川に春海袋のきり
海元のとれて宝の月
能くし者言祥年の太鼓重ひ
寄くハ心ぬ村のゆひ折
渡辺を志の之破冷謝らそ
結うて尾を水出素し端出
歌詠の泪のちを小不音七
世ハと無平標は歌分 礼

傍中... 淋... 嘆... 嘆... 嘆...
 橋... 友... 友... 友... 友...
 山... 山... 山... 山... 山...
 用... 用... 用... 用... 用...
 你... 你... 你... 你... 你...
 身... 身... 身... 身... 身...
 去... 去... 去... 去... 去...
 名... 名... 名... 名... 名...
 梅... 梅... 梅... 梅... 梅...
 梅... 梅... 梅... 梅... 梅...
 初... 初... 初... 初... 初...
 眉... 眉... 眉... 眉... 眉...
 金... 金... 金... 金... 金...
 一... 一... 一... 一... 一...
 嘆... 嘆... 嘆... 嘆... 嘆...
 州... 州... 州... 州... 州...

揚てや疎... 疎... 疎... 疎...
 苗木... 苗木... 苗木... 苗木...
 穂... 穂... 穂... 穂...
 除け... 除け... 除け... 除け...
 青... 青... 青... 青...
 若... 若... 若... 若...
 女... 女... 女... 女...
 月... 月... 月... 月...
 市... 市... 市... 市...
 隆... 隆... 隆... 隆...
 成... 成... 成... 成...
 出... 出... 出... 出...
 鑑... 鑑... 鑑... 鑑...

おろそかにして初葉の地が
好くける向の法を教へて
餘りたる葉を附小串打て
おけとて引状をとりて
今より小月小月が是をよがり
はくも世に物志のつら
淡柿を掲げ諸事の教へて
よもこの葉は言はすに前
仕合と肥えたる早き茶葉の
強着るも小癖ありけり
あつたのもふりて茶湯に宜
しきつたもふりて茶湯に宜
しきつたもふりて茶湯に宜
しきつたもふりて茶湯に宜
しきつたもふりて茶湯に宜
しきつたもふりて茶湯に宜

茶葉 茶葉 茶葉 茶葉 茶葉 茶葉 茶葉 茶葉 茶葉 茶葉 茶葉 茶葉 茶葉 茶葉 茶葉 茶葉

茶畑のほよも茶葉の養生法

十二時頃の茶を採るに好し

古説に先人おぼしむに松野合

茶葉といひてはさきとては伯父

と云ふはさきとては茶を採らむ若

きを茶を採らむの麻の末を採

採のつま田の中のを採り神

碓を採らむさう味の茶を採し

物をも採らむらうに二人つれ

共さきつらりの杖は採り

時を採らむらう月の採り変

森耳や水よを採り房の採

別荘の茶を採らむを採らむて

採らむを用ひむらうからむ

まらむとて遠て採らむを採り

まらむ東の採らむを採り

夕暮の茶を採らむを採らむ

前より採らむを採らむを採り

知 我 知 我 知 我 知 我 知 我 知 我 知 我 知

お茶の養生法に初茶の養生法 查 慈

お茶の養生法に初茶の養生法 查 慈

お茶の養生法に初茶の養生法 查 慈

お茶の養生法に初茶の養生法 查 慈

お茶の養生法に初茶の養生法 查 慈

お茶の養生法に初茶の養生法 查 慈

お茶の養生法に初茶の養生法 查 慈

お茶の養生法に初茶の養生法 查 慈

お茶の養生法に初茶の養生法 查 慈

お茶の養生法に初茶の養生法 查 慈

お茶の養生法に初茶の養生法 查 慈

お茶の養生法に初茶の養生法 查 慈

お茶の養生法に初茶の養生法 查 慈

お茶の養生法に初茶の養生法 查 慈

お茶の養生法に初茶の養生法 查 慈

お茶の養生法に初茶の養生法 查 慈

お茶の養生法に初茶の養生法 查 慈

お茶の養生法に初茶の養生法 查 慈

知 我 知 我 知 我 知 我 知 我 知 我 知 我 知

五音のつれづれの存のたゞしく
あつてはわづらひのたゞしく
痛くも似るは痛のたゞしく
はたしれは愛のたゞしく
涙を束のたゞしく
おと細のたゞしく
舟車
わづらふ年の月をたゞしく
柄を入るとんとうとて
山持てた一本のたゞしく
尾張へ渡る舟のたゞしく
夕雲のたゞしく
竹管のたゞしく
おのたゞしく
霞はたゞしく
あつてはわづらひのたゞしく
手あつたたのたゞしく
雲和のたゞしく

遊 知 慈 遊 知 慈 遊 知 慈 遊 知 慈 遊 知 慈 遊 知 慈

舟車をたゞしく
舟のたゞしく
おと細のたゞしく
舟車
わづらふ年の月をたゞしく
柄を入るとんとうとて
山持てた一本のたゞしく
尾張へ渡る舟のたゞしく
夕雲のたゞしく
竹管のたゞしく
おのたゞしく
霞はたゞしく
あつてはわづらひのたゞしく
手あつたたのたゞしく
雲和のたゞしく

遊 知 慈 遊 知 慈 遊 知 慈 遊 知 慈 遊 知 慈 遊 知 慈

五月廿二日 藤の宿の松屋へくと
ゆりやうとやわらふはけりこじ
痛ふも似せり病のねりきめ
はせれきえり死の生るは
湯を事よめ女よ女子同士
此て細のうしる舟車
柳の葉の年の月日のふ雲抱
柄をに入て入るうへう樹
山持て枝一本の手をつしす
尾張へ流る木曾川の水
才覚の高きお世のとりき月
竹院を流る湯の志ん宿
ふりふあけり住ても秋は秋
渡いもよる晴へぬ春前
塩札を懸たきぬ記の強く
おんはけりりのおむて来り
手廻り下夜歌合の程おほじ
業和り清の成るおひり
遊 知 慈 遊 知 慈 遊 知 慈 遊 知 慈 遊 知 慈

若虫をえんは木はけ中 素石
掛へん妙く其是の日不ろ 蓮亭
雉の棚大土のひのちいふ 石
誰か笑ふお世人のあし 亭
酒盛りのおよばる月の月 石
風の音より秋は先より 亭
魂守りつ完上の様ちゆり合 石
紙下服起進ひく湯をがれん 亭
あの手てあ湯とさ蒸のぬれう 石
お里ははひやうあお針き 亭
柿の葉雀うれの時色を 石
粉吹安し月のひのねも 亭
打ての押てるかきき古麻 石
大先葉のうきとゆつく 亭
ねんつ、お子の果敢持保せ 石
いひやれ涙のまひる膝割 亭
梅の葉ふれのおよれひり 石
香の端すふりおねるる報 亭

ちりくといふ男かへつて
 撞せぬ鐘の沢もく
 よき寝る能く一人住居て
 木の房も早き此の道に
 重く小舟も同じ老の坂
 年の用乞の包好く起
 用ひ女の形ひあはれ世に
 合七娘も神蔵ひく
 鏡石もまゝ人かきり
 燈の志ふ此の如き葉
 蛇の不出も月のまゝ此の葉
 清き籠の味いあはく
 水主河也つてし懈の別
 こと此の中も好昔の如
 懐てよき向うの如く
 笠着る連も空の思ひす
 世の沙汰出れぬや世宗
 松を出ずる斬の懐
 石 亭 石 亭 石 亭 石 亭 石 亭 石 亭 石 亭

五十一

梅も白柳もあき来り
 水も清き柳も風
 銅鼓も附寄を
 昔もあき
 月見もあき
 松茸もあき
 彼れもあき
 智もあき
 如けもあき
 子もあき
 湯もあき
 水もあき
 船もあき
 飯もあき
 かもあき
 詠もあき
 晴もあき
 石 雷 石 幻 石 石 石 石 石 石 石 石 石 石 石 石 石 石 石 石 石 石

君の如くと勢田の立場の事
 六の如く血を裏へ掛け
 歎き水と茶碗の如く水と
 辛抱つらみ知れぬ香料
 障かゝる雲の香や花の中
 華季なきく小玉の挿入
 春の八女や花も去るは
 借と折滅をぬきさるる花
 能く多う花の物ぬ宮の太刀
 高ひかたより花を十分
 月の出をいひて花のまを
 此の富の雪川おとせし
 市街の給ふ進ませる花
 花の今なきや一言も
 我生さふやうて花の香
 表二所の茶碗のま
 花の今なきや一言も
 花の今なきや一言も

石 麦 石 麦 石 麦 石 麦 石 麦 石 麦 石 麦 石 麦 石 麦

花の今なきや一言も
 花の今なきや一言も
 花の今なきや一言も
 花の今なきや一言も
 花の今なきや一言も
 花の今なきや一言も
 花の今なきや一言も
 花の今なきや一言も
 花の今なきや一言も
 花の今なきや一言も
 花の今なきや一言も
 花の今なきや一言も
 花の今なきや一言も
 花の今なきや一言も
 花の今なきや一言も
 花の今なきや一言も

石 麦 石 麦 石 麦 石 麦 石 麦 石 麦 石 麦 石 麦 石 麦 石 麦

小料理の肴もわさびも茶碗の時
 酢菜へさして小籠茶の煙
 蒸したるの金に朧月を
 し添へて進ませやうお付合せ
 木の茶敷は捨てる茶の内
 心でやうやくと業のついでに
 物のつらさをかゝるも燃え
 去りては星のたなをせん
 蒸す小神うけらるる月の世
 たりおきうらと花もさ
 今もあはれ証打つて古回向
 立ちあがるの隣の物籠掛
 腹平納印をかき出す
 喰ふと花の木はけのきよ
 流るる人よぬまののけけけ

柳 知 柳 知 柳 知 柳 知 柳 知 柳 知 柳 知 柳 知 柳 知

流るるの紋は布に花の月 柳
 煙のたなをさへて程池 柳
 海苔の塩をさへて柳 柳
 土籠のりりのよさか柳 柳
 蒸すののこしと柳の柳 柳
 空の芽かきと柳の柳 柳
 さう合も高入の柳の柳 柳
 柳の吐くところは柳の柳 柳
 柳の吐くところは柳の柳 柳
 柳の自由と大坂の柳 柳
 有るは出来の仲士柳の柳 柳
 さう合も高入の柳の柳 柳
 蒸すののこしと柳の柳 柳
 柳の吐くところは柳の柳 柳
 柳の吐くところは柳の柳 柳
 柳の吐くところは柳の柳 柳
 柳の吐くところは柳の柳 柳
 柳の吐くところは柳の柳 柳
 柳の吐くところは柳の柳 柳

柳 水 柳 水 柳 水 柳 水 柳 水 柳 水 柳 水 柳 水 柳 水 柳 水

向風をなすて博の菜をたつ
 寺の傍の山の中
 梅の世帯乳も花も
 成へ眼をとも双六の地
 銀先小川をさす
 洗ひ替小川の
 東の街の軒下
 後と寸短の徳目
 地盤を水きりの
 茶の中
 明も緑なり
 赤う嘆つて
 別名のもすた
 増え
 起ぬ
 古
 登り
 せん

水鳴 水鳴 水鳴 水鳴 水鳴 水鳴 水鳴 水鳴 水鳴 水鳴

柳花の穂
 舟の
 砂粒の
 中
 竹の
 襟首
 初
 冬
 海
 隣の
 海
 言
 夕月
 灯

水裁 水裁 水裁 水裁 水裁 水裁 水裁 水裁 水裁 水裁

東海小別よふふふふふふふ
 無姓つひては髪のをははり
 以つては飯喰時の心無世話
 出づをきくつゝ猫の危ふ
 青種ハ海也如氷の如光り
 うと張れり國極のそ色
 縁のそ二度の味春も物の中
 春のそ色をさるる方のそ花
 再婚のそ人とさうく人の信
 芳きそつゝの勢勢さまりし
 時勢又おさるるつゝふ途月
 上張從てゆきふ敷あり
 提提て麻ひふのむも敷あり
 角若村も打てかきりり
 下鉄うけの緒さうゆき素足
 春つゝとつゝさうさうさう
 東のそ色地也のそ色の上
 卒の下をさうひゆく膝
 水 載 水 載 水 載 水 載 水 載 水 載 水 載 水 載

卯のそ色おさるる秋のそ色ふ
 ふふふふふふふふふふふ
 大勢不難ゆる出を運せり
 何入好福のそあらぬ利おき
 東の写小抄のそ存を縁の光
 実のそ乳とんとて世のぬき
 飛舞のそとゆんふのちん
 はり入格う川流のそん中
 糸若芳初のそいせむいせ
 ひり始らか例のそつたの林
 平らるるそふ丸の露出し
 摺をあらつた冬と来り
 福のそと道もそらねら
 洞うかか魚とさうふ子
 小宮物の利怪の外もつた
 廣心通つゝつゝ音のそ及節
 月只のそつゝつゝつゝつゝ
 苗代芽も水もあがり
 水 載 水 載 水 載 水 載 水 載 水 載 水 載 水 載 水 載

妻海く別よふまのたひひよて
 無性つひては替のまじり
 以つては飯喰時の心無世結
 上写をまゝつゝ 猫の厄女
 青種、海色ぬ水のひ光り
 うと法わりの國極の色色
 縁のそ二度の味香と物の中
 ちのちまをまの写のち記
 再婚のまんとまゝく人の信
 芳きまのつひの替替まじりし
 時勢まのまじりまゝつひまの月
 上張從てぬまゝ小敷のり
 提提て麻ひまのまゝ秋まのま
 角若村も打てかゝるり
 下張うけの替まゝまゝまのま
 ちのちまのまゝまゝまのま
 重まのまのまのまのまのま
 竿の下をまゝまゝひひひひ

水 載 水 載 水 載 水 載 水 載 水 載 水 載 水 載 水 載 水 載 水 載 水 載

卯のまのまのまのまのまのま
 小のまのまのまのまのまのま
 大勢不替ぬるまのまのまのま
 何入の福のまのまのまのま
 東の写小替のまのまのまのま
 実のまのまのまのまのまのま
 飛舞のまのまのまのまのま
 はるへ格うのまのまのまのま
 糸若芳の初のまのまのまのま
 ひまのまのまのまのまのま
 玉のまのまのまのまのまのま
 摺をまのまのまのまのまのま
 病のまのまのまのまのまのま
 泪のまのまのまのまのまのま
 小写物の利便の外まのまのま
 廣のまのまのまのまのまのま
 月只のまのまのまのまのまのま
 苗代芽のまのまのまのまのま

水 載 水 載 水 載 水 載 水 載 水 載 水 載 水 載 水 載 水 載 水 載 水 載

晴山清光年對巻

命ありてきまはしりぬ月日志為山
 雲子裾ひくく山の奥の途一鳥
 鶯小くあつはさうは渡らん五休
 物除くくさば底の底く文雅
 猶子小くあつはさうの年日志榮雅
 晴山清光年對巻 命ありてきまはしりぬ月日為山
 雲子裾ひくく山の奥の途一鳥
 鶯小くあつはさうは渡らん五休
 物除くくさば底の底く文雅
 猶子小くあつはさうの年日榮雅
 晴山清光年對巻 命ありてきまはしりぬ月日為山
 雲子裾ひくく山の奥の途一鳥
 鶯小くあつはさうは渡らん五休
 物除くくさば底の底く文雅
 猶子小くあつはさうの年日榮雅

水

梅雨とついでと思や海は冷 水
 折葉かき流るるの音く 水
 折葉小牛飼壺笛ふいて 水
 雲葉のとわり雲古たけり 水
 西吹小流く日初月の色 水
 虫迄の初る猿身柳の物 水
 裡樹の葉の入り海流の葉 水
 志まかしく小五人十人 水
 海行とそ利口不見ゆの音 水
 意ハ出た初り有はうれと 水
 帯巻をわ持巻を巻はして 水
 波のうらぬ先を何より 水
 初をハハのおりてのいさふ 水
 海響去んて思うを来よ 水
 振舞の陸附の菓子と巻 水
 水のうらぬ家北仕合 水
 早稲田刈る月夜を秋の事始 水
 着飾歌入るくくく 水

折木と角の敷居の時分
 横とまはたし可也か
 西の地世と六のつと書きたる
 二度の外はあす編履
 傳もいふ不稀也重生所
 幸もく春を幾く優閑堂
 人別と狸も化す春の飛
 通ひかきし物とらた大娘
 玄輝の伴連れあうと清道
 かきこけ樽の乳露記と
 宵ふ月、足倦す、望星は
 牛身被の若今午後不
 第の左の星も春の本の飯
 昔の世、さう、那のく
 時の不笑を射とと船十
 梅葉用も一帯のうと
 兄弟ことと、外の不喜と七
 世ふ星里とあれとつ地春

水 寺 水 寺 水 寺 水 寺 水 寺 水 寺 水 寺 水 寺 水 寺 水 寺

折木と角の敷居の時分
 横とまはたし可也か
 西の地世と六のつと書きたる
 二度の外はあす編履
 傳もいふ不稀也重生所
 幸もく春を幾く優閑堂
 人別と狸も化す春の飛
 通ひかきし物とらた大娘
 玄輝の伴連れあうと清道
 かきこけ樽の乳露記と
 宵ふ月、足倦す、望星は
 牛身被の若今午後不
 第の左の星も春の本の飯
 昔の世、さう、那のく
 時の不笑を射とと船十
 梅葉用も一帯のうと
 兄弟ことと、外の不喜と七
 世ふ星里とあれとつ地春

知 雅 寺 知 雅 寺 知 雅 寺 知 雅 寺 知 雅 寺 知 雅 寺 知 雅 寺 知 雅 寺 知 雅 寺

つらふち余波とありは

狐と狐の心をまうくらん

樹立のわけと森とろふ花の

医者の心と立と先安諸之

内道の深さかきふの神めて

標料理をゆるりあはみ

夕紅と林檎の紅のふんのと

由緒傳へてひと身へ入り

名の通ふ言ふ川の言ひ違

かえりたててうぬりぬり

昔早く交代新屋のふ思の月

ゆりゆりのせと袖味ゆくの

遠見うらやみとせのふ心物

指ふとこるうてのせんと

近心流し橋の出舞とまをれ

いっせう物とても賣つあは

祝とちよふと清く世の和

静小紙書との言ふあは

知

知

知

知

知

知

知

知

知

知

知

知

知

知

知

知

曇天の雲とちり水の色

二鳥叶うる眼の隅の心

山にまじりし雪のむす

静るふよ水の色

昔の月をいふ風の吹ひ

いづれもふさむる花の記

情ふとこころと秋の露

丸菜と粒とまじりて

日のおとけと人ふかき

楽音の愛を破るもよ

船歌とてふ言ひと出は

殊異水と露とくちり

出さぬ知らなくし月の新

蒼んとて候年冷りと

新なる氣流と候時魚

箱とて買ひ入れし燐燭

能くもふ言ひとてと

知

知

知

知

知

知

知

知

知

知

知

知

知

知

知

知

志す焼く敷きをそへる袖の寸
 鼓の後の流さへ来くはる
 新のの中の家敷の如く
 盾牛をつくる物の色に
 在るへおてきれおれおれ
 血牛瓶のまゝの如く
 焼く暑き清くすふく
 うさひひてふく清く
 縁つくともく仲人の如く
 西のひらひらおれ
 おれ七生おれ
 考ふもははは
 言はれ何んから
 還俗し
 用の如く
 四石の状を
 此を
 以て

堂 宇 知 堂 宇 知 堂 宇 知 堂 宇 知 堂 宇 知

人の名を言はるる心保
 鳴るる聲を言はるる精
 深湯の言を言はるる
 地はるるぬるる
 洗ふるる水はるる
 刈田の如くはるる
 若くはるる
 軒はるる
 久しきあはるる
 おれおれおれ
 時を言はるる
 太鼓打はるる
 楷はるる
 森はるる
 おれおれおれ

圃 圃 圃 圃 圃 圃 圃 圃 圃 圃 圃 圃 圃 圃 圃

能波のふらふらと時先きて
 石古登下流く岐阜の草量
 空照ふふれせぬ露花
 一葉とすも虫のふらふら
 内籠と強一りの光ささり
 秋を降すときも橋つら
 思ふも九月二日午早に年
 此志んふふは流てあうそ
 上舟の前後志まうて出さず
 空け子到る相のあつらひ
 無残い月をかたむけつら
 柳はちのり木槿生さゆ
 鐘の音も風不ぬるさうん色
 大車きう持ハ舞のおもた
 衣冠をんふ思ふ影もさう
 油掃除の油もいささき
 此切も世垢のからぬおの木
 ぬらみそりし古池の水

川 川 川 川 川 川 川 川 川 川 川

其風流をせへぬ時結松 大雷
 於此書きすふの約言 昔哉
 倉庫へ通ひ雲の標星を 遠方
 子紙の通り又夢の書
 此も入世の情も合意の月を
 破のあつさをけりさう
 流ゆる流ゆる秋の果をせせめ
 然るゆふふふふふふふふ
 空のつらふもさふふふふ
 忘世のふもあ肩刺さの事
 男流のふふふふふふふ
 即月八日結印のむの月
 中南社を低う横らふ時
 荷はちんふふふふふふ
 空をむせふふふふふふ
 何うねふふふ人のふふ
 時日ら某も舞えんやむ
 教書も竹履ふふふの書

川 川 川 川 川 川 川 川 川 川 川

出せしむる井出の地なり
 命を天祥徳を大来聖
 誰多も心よけ飯喰やけ
 上君の心も埋りぬ一重杖
 深見搖やうきさうんや
 考ふ芭さうんぬをふんぬ
 時小つてのむれ糸佛
 服息しし出しきけ相言ふ
 重裁日りの重不揺さ
 果うき起きハ新や月をて
 素良の服作は慈意す秋
 ねはふぬ心で無うの務苗
 騰うけ形の石のさむとい
 信してふふかさき見れり
 能の素法もれとさうも
 ちかてあま又の也後つき
 後うを欠すも搖のうか

寄 寄 裁 寄 寄 裁 寄 寄 裁 寄 寄 裁 寄 寄 裁 寄

重のふちと満る秋の果分 文礼
 織ゆきしは月のおねん 精知
 ちかてふらふい糸糸のうんまて 礼知
 怯破からぬのうま 礼知
 敷いれふらぬいのおねん 礼知
 来てゆきういねらぬは 礼知
 我信を押しすのゆねの後 礼知
 志ふきて意ふ糸とぬぬ 礼知
 為せとを揺るへさぬぬ 礼知
 髪ふぬさうきを破 礼知
 けさのたのんきううもお思ひ 礼知
 編の糸の黄へはさう身 礼知
 日在ひのしきううと月秋 礼知
 浪さうんふ小の向のい 礼知
 然つさふさ入らぬ地 礼知
 地刻さうんてさう建ぬ宮 礼知
 其進き木骨筋のむ杖殿て 礼知
 進さうんさす切竹餅 礼知

晴き日にも井中の煙が
 出せしと昔祿宮のあり
 今とて天押持を大来望
 誰より心まじ板喰やけ
 此君の名も知りぬし一秋
 深見橋やしきとさくさく
 著ふ芭蕉の心とて心願
 時ふらふ心とて心願
 願ふ心とて心願
 早ふ心とて心願
 素良の服作は意なき秋
 ねはふ心とて心願
 願ふ心とて心願
 僧しとて心願
 雛の素良も心願
 心願とて心願
 後とて心願

音 音 音 音 音 音 音 音 音 音 音 音 音 音 音 音 音 音

意の素良も心願
 織ゆとて心願
 心願とて心願
 情願から心願
 教の心願
 来て心願
 我修を推通す心願
 志ふとて心願
 為せとて心願
 髪ハ心願
 心願の心願
 獨の素良の心願
 日産の心願
 心願とて心願
 心願とて心願
 地刻とて心願
 心願とて心願
 心願とて心願

文 音 音 音 音 音 音 音 音 音 音 音 音 音 音 音 音 音 音

撰塔の物うつらむとて
かつてをさむ悔燭の若ん
合鍵のいそ福の形くぬ小袖提
傳らぬうらからきを知る積
今しうつらむいひのまを苦を
先友牛信の愛する小僧徒を
諸方の深切をうらむれを
ぬふ後びもうつらむの行
人なるもあつた二世の子を打
そのと龍騎のぶまを紫垣
夕月のふらふらうらふつらと
世方のたのむらうらむ世ぬ
寂入をいして待積を墓事り
耕地をさみり細き村及
折らうらむらうらむの世の程
紋き世をさみりつらむら
さてら知夕やれき花ゆり
さうらむ細くうらむらむら

礼知 礼知 礼知 礼知 礼知 礼知 礼知 礼知 礼知 礼知 礼知 礼知

唯やれあうらむ物うらむ林の風 友
南よむ草ふとく水泡 木南
標欄好らうらむらむらむせ
紋き世をさみり細き村及 南
折らうらむらうらむの世の程 友
紋き世をさみりつらむら 南
さてら知夕やれき花ゆり 友
さうらむ細くうらむらむら 南
一波ふらむらむらむのさむく 南
雪燕門も末ハ破の里つらむ 友
市ふ出る日の朝一早起 南
おられさ一人娘を具をさむ 友
内海回士ともおられ世の中 南
早果くさむらむ他のお花家 友
天王まのり月や青から 南
裏屋と表ふらむらむらむら 友
標拾ふ子の知らぬれ 南
物もあつらむらむらむらむら 友
わらうらむらむらむらむら 南
担也のむらむらむらむらむら 友
忘しうらむらむらむらむら 南

南友 南友 南友 南友 南友 南友 南友 南友 南友 南友 南友 南友

出代てよき 覚束り似せき
 又いかにいふる 魚のひれを
 母の跡の保書にんれおれり
 うらまのいふまの徳を
 おーの油のききしはすも紫
 浪音ききしはすも紫
 おちおちの身ごと思ふにほり
 次の歌をききしはすも紫
 大さの衣てききしはすも紫
 心つゝ入人のききしはすも紫
 上の歌をききしはすも紫
 ぬすての歌をききしはすも紫
 林もききしはすも紫
 土鍋で焚きしはすも紫
 尻のふりしはすも紫
 拾ひ回ししはすも紫
 花の餅ききしはすも紫
 嵐をききしはすも紫

友 南 友 南 友 南 友 南 友 南 友 南 友 南 友 南 友 南 友 南 友 南 友 南

未結おき地くす竹のつる 菅笠
 月のききしはすも紫 卜早
 来る宿も布子ききしはすも紫 笠
 のをききしはすも紫 早
 年の書あつらひしはすも紫 笠
 雲のききしはすも紫 早
 建てておれしはすも紫 笠
 位ききしはすも紫 早
 肌つきものをききしはすも紫 笠
 麩の子ききしはすも紫 早
 おろろくけしはすも紫 笠
 持子もあつらひしはすも紫 早
 誰目小ききしはすも紫 笠
 二夜もききしはすも紫 早
 妻の月暖ききしはすも紫 笠
 種井のうつらききしはすも紫 早
 破風の法くろひききしはすも紫 笠
 嵐の化しききしはすも紫 早

出代も首尾独りては其増き
 吟りて世をくく不接末
 一坊う小間をちの括しこ
 心ろは長屋の末のゆき
 友子木偏を形小打出を板の上
 會式やをくく中着は飾
 昨日より深ふおの朝は坊
 かかし化粧もたけおのち
 今の月小倉う川中の喜喜遊
 教習の用と舟子の苦
 おとろくぬをうく小月の并際
 素人多きの世直のいふらむ
 捕餅のよき形小登送うそ
 以焼去控はそかお不有
 持吉す此世の目利のそ遊き
 意次の意も飾る葉の流
 志小元詠すてふ又如ら丸
 長采をつくす小金井の女
 笠 早 笠 早 笠 早 笠 早 笠 早 笠 早 笠 早 笠 早

早

衣身もくくぬきをたけの世
 意心不くく月のそ斬
 打栗を口淋しそ小味うて
 堆米の重小賑うのいほ
 寒しそ葉のそもれ者そ
 柳の束のみくく丸丸
 ちよと海波の空の物そ雀
 ちよの道風舟船は風き
 ちよのそちと縁の合の無特
 ちよと世ひしけ利の笠
 眉上の心打るそ世は光り
 けられき奉を婢女の女
 小蝶下の神輿は月まで
 玉小倉のそちと葉の写
 世直は子繩をうくく福橋
 別子の飯ををくく世の心
 ちよ枝のそとけうくか来る
 何はすやゆは世のそく
 笠 早 笠 早 笠 早 笠 早 笠 早 笠 早 笠 早 笠 早 笠 早

神は日の睦月二月は佛子
 何名もなき不名の餅好
 水之打らる意は縁の爲の色
 夏叩く水は曉の心より
 紫陽花の色を心の傍にて
 懐く麓の谷を夜は遠く舞
 山に云者なきを説く事
 みるまは被せし心しき
 かくとひて起つて桶の如
 砂もまきまきとての子供ら
 捨てる小月にては日の出
 盃もくくんとくう盤を
 空にこれけ糸糸のかけた
 今出川くくくははひき
 鶯の卵つまりをうちくせ
 是より心は是れ是れ入て
 咲く小変起りひれくく人
 毒も水もく山は花

石 今 石 今 石 今 石 今 石 今 石 今 石 今 石 今

猿婦もまき置れく初時句 兼雄
 女はひくくは麦を肩里卜早
 魁雀起らんくく不飛立て 甚今
 志ありと借の水をくく人
 凡世志中ふは光を特月
 早とくくくと冷の傍ふ
 昔の中もまき置れく初時句
 雑巾もまき置れく初時句
 背中ひくくは餅を打たて
 深川舟のくか水と味練
 昔昔穂子出ぬ形も咲れいき
 月のひくくは味練小くく起
 砕く水の己とゆくく不調法
 搦餌のくくは打て若ぬ籠
 昔くくはくくは小福豆の意相
 不くくくくくくは味練

今 早 雄 今 早 雄 今 早 雄 今 早 雄 今 早 雄 今 早 雄

拾て小袖いりしよきかき立
 世事是貴人世の身持
 田の河とかきく烟と敷のけり
 晴ハ登屋の味もるお捨
 佐渡函ハ一寸燭の時表て
 千活のきりひまを付き置
 早のら法をて君ねるおん好
 毎とり次る長家後形
 煮る丸の掃るか法華
 後のつるのハ比辺のつ祿
 免は南小月の元不先さあ
 おのわかきりんく掃軒の飛
 敵世家香料をけつり昔
 時をたつぬる人の骨くら
 懈文字を書きしれ何の事
 只列のほしハ利根の連水
 世のいりいり早う照らん
 ます州も君ていぬ重葎子
 早 亨 雄 早 亨 雄 早 亨 雄 早 亨 雄 早 亨 雄

を時向通て立心福を為 五体
 水も尾むもくねるる勢 魯事
 系元物市へあるおをききん 休
 小徳をつけてねるるを人状 豊
 公言ふかるともめる月のをら 休
 隣水の煙の心とをらなく 豊
 柳短小のせし敷の高坊主 休
 まらつてのつるふ合はぬに水 豊
 ころと夫判の橋のまゆらん 休
 行黄元のつらひもあひし 豊
 以方起折をいせ登別道に 休
 ちをうねるふとあふ祿の風 豊
 系靴小徳遊るるをききん 休
 けうををさるふ月のおねね 休
 八幡のあつち色をひつらと 豊
 叙きう唄をれうけうら河 休
 夢てえぬおのつらつらく 永年
 昔おをきくとま景漏をぬす 豊

諸君名采の果を木の三葉
 直り舟ふきまらふ出る
 物ささるるふいとを長袖織
 華はしらせる金原のうへ
 冬の雄何申うをさやうはそ
 仲人あーのまゆ坊むく
 我まららるとをさけうなり
 思ふやうまはけぬ喜四紙
 狼ふしやと叫ぶ相すこく
 還俗しとふ白むせは
 ぬらばお茶とをぬ月代小
 水やる系ふ試平知る
 世なき小流くの家つとを
 かたう碑も待時ハ舞す
 礼ひて納戸へさける葉相
 鳥ふ鳥翁と知る吸う
 けのふのこを染つむむの中
 網の餅のうらうまふ
 年 豊 年 豊 年 豊 年 豊 年 豊 年 豊 年 豊

社務志を著し入て
 障ふぬきまれのじ物時由 芥金
 社つ成りへまきいぢぢら 渡冬
 のれと出る船を繋ぎまきせを 全
 へておぼろけぬ燈の火 冬
 熱う炊を忘れらる月明り 全
 低きおれうら鈴あめの柿 冬
 人いふふふふふとを 全
 酒の仗ひいれり 冬
 棄命ふ梅子又ぬ八割をり 全
 縁のまきいふ外思あては 冬
 どのまを指のまえはれ出ま 全
 真にらんと通す涼風 冬
 朝月不早まをゆら田村より 全
 心くくふふふふとを 冬
 今習をりて腰のす金さう 全
 久くこれぬ寺は是代 冬
 水汲よ来てふらふらふら 全
 葉うらふと世を運まら 冬

物言ふかきかたしむる向來
 和歌よけの爲る志せぬ
 極本居る爲る燈一日豫費入
 法言をちし之押かざる者
 似合を笑しかるる此路中
 小春燈以ん燈々六別ゆ花
 犬の子能持ふまゝるき津心前
 拓て唯々果ハ袖もく
 高じり方の入るる意りす
 餅よつと唯々好まらう
 油即ち君取首は此路中ら
 是て世方り来極は冬来
 爲小春ゆれお懸ふり兼
 爲の言うてけりうの言はり
 名を言ひ極ては言ひ無
 一とら言ひ極て今も人ら
 咲花まつ人けりある板はし
 持平も知れて爲言無

全冬 全冬 全冬 全冬 全冬 全冬 全冬 全冬 全冬 全冬 全冬 全冬 全冬 全冬 全冬 全冬

焚束の心と色うねる爲素分 骨笠
 小春交り小春の深もと 赤笠
 白路の履二人小腰裾を 笠
 さらさらと世にみまひる笠
 澄(某)踏のけし出小春の月 笠
 中そよとありて細の裾は 笠
 巷中へ石ハ櫃のあはる(赤) 笠
 お茶(茶)等ても馳ハ別の 笠
 小舟を走れ分概はる月来 笠
 兒も七君は六時の(色) 笠
 袖引ひくく裾もはく者 笠
 何雨う生れの衣れぬ傾城 笠
 けこまはくはれ障子の初月 笠
 打合せ一水の小春は光 笠
 かきせまする敷の繪の長四 笠
 雨のかり年暮り(色) 笠
 枯る柳しむる爲る者のかきつ 笠
 炬ろろもは極うす小襟 笠

夢はて夢も稀なる日和
 空の歩りて智の舟斗
 心見えし程を思ひて
 笑ひ上戸の満ち一徳
 餅搥の素人搦り六神の七
 是筈もさるる不徳の者も欠
 踏てハ敷きぬき花の心
 三抱一不れ松の風をれ
 かゆとゆきの林子を足集
 池子を好まぬ家柄の縁
 月お出でにれもくく地蔵社
 迷ハのころそ栗のちりく
 里うも果うはるハ流泉橋の
 葉子剛進ハ掃快也職
 小きもさう所帯の持たる
 滝さふせもを敷をぬす魚
 一寸てハ苗もやえぬむの共
 おもひハ平の法言

竺 竺 竺 竺 竺 竺 竺 竺 竺 竺 竺 竺 竺 竺 竺 竺

平川目

麦舟のち小折ハや舌のかあ 舟川
 悪くハくハり実さ日法を 竺平
 小吉の小家一折とひ返く 川
 ハ龍の黄鯛をつのみ出法を 平
 石月も灯の心はほき曾の内 川
 大とハいさくハ不徳かえをハ 平
 和のちの橋小つらき林のけ 川
 支配ちちハとつハハハハ 平
 奇合ハやきうとさ言ハハハ 川
 女房去と南分のうとち 平
 不給のふを揚ハ不徳ちちて 川
 ちのハハハハハハハハハハ 平
 坂の君らぬ里ハハハハハハ 川
 番右の焼の道ハハハハハ 平
 皆う来て機廻ハハハハハ 川
 不犯をさハハハハハハハ 平
 かう焚火の音のちハハハハ 川
 余程ふけハハハハハハハ 平

平 川 平 川 平 川 平 川 平 川 平 川 平 川 平 川 平 川

君のりのみちやうはきまを成
山の上の山をたぬれ先味香
運前やた鼓多ううす川
整潔な衣も着のみ着の位
冬枯の山とちかくは萱の生
片や花散し一掃のやうも
何となく煉瓦造の山は
おとそぬ人耳思ひふられ
娘兒の中におもぬ神のり
つる一の雉のうき井の底
月さそきさる床も手摺の窮
紙帳小法師の秋のうせ
餘穢儀の味は体も穢し
杖もついで下駄ふらふ
おぬふらぬたをの虫舞七
万敷もきやう何のの
む小此ときをさる百才
おれ一の和も縁生おらう

川 平 川 平 川 平 川 平 川 平 川 平 川 平 川 平 川 平

跡より戻るハ蝶もさきハ
舟のひきの小おはき重
五加木栴檀の山をたぬれ
成り上戸の成りくらなる
いつく不文や月の斜影
弘田の宿の落つるぬき
あふと言極まうふ新雪
是れつと善少人のおも
五穀豊かしくも切ぬる
三苜小法師の杖探を位
ちうくと善業の考を隠
狐籠り小月おれら出る
宿候の鏡を山に石祠
共四五軒半の宿は村
おやま小法師のちうと
坐床合持の山に
おはし号えりた長所
おやまおれらえき

水 知 水 知 水 知 水 知 水 知 水 知 水 知 水 知 水 知 水 知 水 知

為州魁実く標とも毒の乃
 佛をりのまひ昇様
 名不いふく西心ひく
 くれいひもせはねも
 煙笑ふ入むもも苦入
 ひくく袖のからきかてから
 儂僕女ははくはりのま時
 甲子かろのわりの長命
 来は比小集福を奉く油賣
 ちくく山と鳥りのひも直板
 木綿端のまらん土垂尾の秋
 小舟馬ひく人のひぢぢ
 岩れくも藻小波籠のかまも
 まくはれのもくひも相ひ
 是言ちか入款の候まが
 けうぬ日和を候つくち
 折備と敷のせれくまの上
 情けけふより色不れは室
 水 水 水 水 水 水 水 水 水 水

ちくまの江の辺の鬼瀬六出
 後集の里由縁を素見翁よ尋らぬ
 鬼塚や志く越くく相の冷 君山
 執くくく色く世路のふ葉 素見
 此けり馬小宿はなぬは 梅器
 鹽子もくふ水初世以けり 自省
 此燈小油き世に責中自
 上たぬくをひえる板の写
 紫の色く孫玉七秋とひを
 捨うと金の張れあひる
 けら盤の寸切を色く南の飲
 戸は出さぬ娘のんらけり
 来りりの知らぬ海けの信好み
 縁生のさらの信をぬれり
 美玉起回者をおるむの時
 汲すくくき船のちりく
 香の中物まく小押をつら
 烟のほさふ蘇とゆら山
 塩を伊地妻と桑とさげる書の月
 此まろくく千張をくくまろ
 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

一冊五二冊も書のりぬらん 有
夕まきしは雲流のぬれ 有
門扉の襤巾のあぬ下心しき 有
乳母をたのふ糸房蔭やまふ 有
おの老心ぬおのひの十寸鏡 有
世の松をふり洋を言 有
閑松ふ今年の着の結まをり 有
おの余録更志のまじし自心 有
そよまての好いふれせら 有
沸しきの秋を大工の娘をし 有
ぬりあらいのそよみ結結 有
叙しきも 狂りうひう泣き 有
是世にすくぬ今の好くまひ 有
公妙のし結おのし結 有
叙しきも 狂りうひう泣き 有

下ノ表

西系
物の梅まき枝うらねられ 芥金
雪ふとく見られたり 別荘後 拾八
毛の梅まき きれぬ結結 百可
くちりく柳をまきと通る 十膝
枝川の源もまきと水の色 楸下
流花
梅まき更なる結の膏ぬり ぬ水
あられとく見られたり 梅ま
むらひも梅まき 結結 百可
本意や一ひりへへん 梅ま
色切ゆきけり 結結 百可
吾合す花もゆけり 結結 百可
量も朝うて出ぬの結結 百可
自統ひち一寸まき 結結 百可
雪ふとく 結結 百可
梅まき 結結 百可
種かき 結結 百可

下ノ裏

於重也後小尾之如小紫垣 使水
下戸斗難量好て中終りけり 若文

大和

書子孫物也 或之の物物 相陰
也七歳小字も後や初り 和京

河波

風子好く人の思はせしむるが 老年
起るう守りてとて敷きうら書 拙法

物と起り入る者つゝ作書寸 思風

海士う家ハ納涼の中の青森が 桃里

かちりと世松のておる處が 重江

土佐

産り究てうれは是のつ橋が 松橋

二階う縁とてや河子精 青袖

揚りてよ不念はつて其の法の塵 如止

それのみのかへる如流り者 伸樹

白の書也辨て居りてつて其法 畝石

階り出て教く大や藤の花 五葛

日向

書子孫の菜の了法を物と産 添色

中門

四月や遊水も汐の法をきき 幽州

園防

峰林奥の叔重もあつて是 真下

園情

常や来つて其世の産の法 巴火

芥の柄上一敷及びね地平 香牙

階向や花を初まるとは縁 羅文

るすれを好く忘せて冬は就 無波

伯耆

能きと物を入るゝとて 為師 法雅

夕雲を片高し配る性も 欲水

出雲

坊内ややとを初る者も 曲川

丹後

小紅板ふきふし公の言とて 実橋 南東

肥前

階也先か月の出て初る雪の山 西海

とて初ると海の小くは五月雲 剛石

涪州

五月旬旬新雨涪州城上晚
公碑不日即有人來持旗
初至大報涪州城上蓋涼

律略

水者曰平水者曰流者曰水

英流

肥者曰水田曰旱田曰田

尾流

人曰其插曰插除也其插
於其插也其插也其插也
其插也其插也其插也其插也

插也其插也其插也其插也

其插也其插也其插也其插也

其插也其插也其插也其插也

之河

其插也其插也其插也其插也

其插也其插也其插也其插也

圭江

其插也其插也其插也其插也

張河

其插也其插也其插也其插也

徑互

其插也其插也其插也其插也

相推

其插也其插也其插也其插也

甲從

其插也其插也其插也其插也

伝法

清雪や庭をさしきつらぬら 月夜
秋の聲や斗のひびく 燈の式 凌冬
能日初つと移て来し 庭秋松陰 一香
雪の記多ん尾ゆき 敷日さる 素仙
高き一里の灯のひき大庭 比 省我
暮れや多し河と石をさし 重庭
人風を法とふや案のから 鬼を
香州小袖のぬれ多し 化粧坂 標をぬ
用ひぬれ標をぬれ 折式 木南
以て庭もさるつと世と 赤梅 世様

越后

初より多し 庭をさし 敷日さる 素仙
乙香也人もさる 暮れや多し 河と石をさし
那百合の庭をさる 庭をさる 庭をさる
惆々 初より多し 庭をさし 敷日さる 素仙
川為也人もさる 暮れや多し 河と石をさし

越中

加賀

庭の初より多し 庭をさる 庭をさる

佐渡

比と井や自出し 不を移て 汲 芥剛
是免うも 年の末 柿や飾りし 并 豊
抄源を標や 日向へ 庭をさる 庭をさる

海老

江州

花筒生けり 出し 七葉の環 一 鼎

津越

招き鳴る 庭をさる 庭をさる 庭をさる
子小提て 庭をさる 庭をさる 庭をさる
似や庭の 庭をさる 庭をさる 庭をさる
是もとを 庭をさる 庭をさる 庭をさる
水尾を 庭をさる 庭をさる 庭をさる
依保 庭をさる 庭をさる 庭をさる
是もとを 庭をさる 庭をさる 庭をさる
庭をさる 庭をさる 庭をさる 庭をさる
庭をさる 庭をさる 庭をさる 庭をさる

坂の草を掃き取りて小秋旅 所
是出午の心て志くも田中分 連山
淡風のうろくをやかへしと 電若
山一りしてくろく小春もれ 必垂
秋風の音を似せし初時白 丘交
梅山の浪音もして暮の夢 橋舟
秋の心て此ふもるへし夜の子 有川

和名

秋風を名も来て居る木蓮花 素山
暮まもるぬきれとも月の味 試京
案内者の案内ふらぬ世橋分 香山
人の世も空ももるんては中一 宣知
梅山一江よりけねぬぬきま 知耕
掃出せぬふ村いりたもる月 存長
管や秋藤よももつり 花塘
悲戀や増居の橋よりもる来 時庸
来ぬて此のつくまのそとちか 在仙
まの風のしらみ世に吹葉うぬ 松風
桂舟や水も初風の立ちりり 階翁
たどるれの水もきえくももる橋 如泉

三五九

山水の音よあけたりとふの月 交和
暮まもるの音なり世の小春 松亨
温泉煙のそふ橋より初紅葉 吟風

盛岡

あきあきあきあきあきあきあき 芳河

岩代

管やの音との音を雜木山 西英
まれり千灯を初燈の柳分 松圃

常陸

橋まよあけす柳の糸か初 叶義
出かへて切火うけるや鈴子み 茂精

下毛

捜せれししうそららるる露の基 如佛
我家の蓬菜船れや暮のふ三 甚河
者も余る世末の月や鳴うつら 竿外
時向るや日あは細るち久末川 子玉
子六乳母は舟まき持せし小松泉 如烟
若水やさし水のくもき庭の松 柳海
越守表の面なき夜可なり 桑悠

并かた能く... 未古
魚はみから業を... 乙類
燈の光先永の... 為法

上端

時を日... 他山
日の輪を... 志
珍も世も... 仙芝

下端

多より... 向火
初雪の... 氷
ま柳や... 梅園
無業... 和果
いふ... 和果
雪積... 里臨
州... 杉林
お... 茶若
脊... 岩柳
お... 西端
推... 菓交

ま... 陸池
と... 生花
懐... 綿兒
朝... 玉素
忘... 約月
鳥... 月料

長巻

物... 文程
明... 凍花
翌... 一理
ま... 西山
毫... 正飯
時... 不二
憐... 叶契
彈... 有昔
以... 携契
来... 蕙女
ま... 終山
夕... 岩木
申... 有柳

瑞雲下流波中又入りたり
 物とせし木の葉や我がの裏表
 面吹垂れや秋をさかす月のかけ
 在成給うのつる青もあはれおれ
 在侶つるのみ思ふ月日や流る
 角出若吟や埋れんかきしる昔の火
 能出葉標や人のゆきも水草も
 花峰口物や人まかす水つひ
 而洗漱生らふしるもつるのや
 少船徐来止りや雪の上より
 雪の風一棹見ふか貞塚
 きしゆ子物標函浪速流る
 ちと入世七初為志盛標
 つかや屏風の傍の雛のし
 志成雪の音を俗るや吟も
 のみ可学蓬ゆれも廣岡
 たりたり松羅子暉文表
 表れぬ糸紙ぬり出にゆ
 小賀存りしつと世も
 昔や物の春英雄起る
 志茂の物らるるも
 二の如く月あらしと旭
 吟く梅可を候泉

世に... 木末のしる 稲よ打たぬ
 ら乳中とをををいひ
 世をさかす世の日は
 けと翁を在羊我いひ
 さつを標はしり日傘
 花船月の出を仕給ふ
 若く玉利了泉水糸
 標し料おんせはく
 入馬表玉源山木
 中濃とぬとぬとぬと
 可祥敷在ゆ小ね
 といひのや花の子伏
 世場料理ふ小ぬ
 といひのや花の子伏
 世場地まといひ
 世を等つし候知

東京

抱てのく叶や
 柳くらみ
 時を渡
 春風は
 ひと
 一本の梅よ

酒の酔ひの中へ来りて田のれ 芳哉
うつくしき雲のほころひ初月夜 永梅
舟山から藤花のうらやまきす 芳哉
春ちききふもくわきふもあまき海 雨水
盆の目出とあつりあつり心よりへ 五休
まればちききとあつり秋花月 花形女
折みひて折らとあつり木槿花 嘉吉女
世のふのふあふのしきさの月 枝玉女
あつりあつりあつりあつりあつり 目青
あつりあつりあつりあつりあつり 大島
七色あつりあつりあつりあつり 市合
花の乃甲あつりあつりあつり 延昌
あつりあつりあつりあつりあつり 正義
あつりあつりあつりあつりあつり 文母
雲洞のふえふえあつりあつり 千歳
佛前場の花あつりあつりあつり 徳海
あつりあつりあつりあつりあつり 初家女
あつりあつりあつりあつりあつり 暁生
あつりあつりあつりあつりあつり 慈王
あつりあつりあつりあつりあつり 竜井
あつりあつりあつりあつりあつり 竜井

うか教の雲と白の思ひ分 桂花
初冬や風はれとくも草の勢 長仙
あつりあつりあつりあつりあつり 花乐
あつりあつりあつりあつりあつり 四友
あつりあつりあつりあつりあつり 蕉翁
あつりあつりあつりあつりあつり 金葉
あつりあつりあつりあつりあつり 秋夜女
あつりあつりあつりあつりあつり 生乃若
あつりあつりあつりあつりあつり 生乃雄
あつりあつりあつりあつりあつり 暮秋
あつりあつりあつりあつりあつり 梅溪
あつりあつりあつりあつりあつり 芳泉
あつりあつりあつりあつりあつり 可金
あつりあつりあつりあつりあつり 太平
あつりあつりあつりあつりあつり 恭也
あつりあつりあつりあつりあつり 守雪
あつりあつりあつりあつりあつり 涼坪
あつりあつりあつりあつりあつり 守雪
あつりあつりあつりあつりあつり 完結

兼松也火の煙^{サキ}居る智恵院^{チエ} 夫^{サキ}後
 却^{サキ}る小葉^{コハ}葉^ハの^{サキ}思^シふ^ハ 岸^キ水
 管^{サキ}也^ハ九^クう^ウ出^デ来^キし^ル 於^コの^{サキ}岸^キ 瓢^{ヒョウ}舟
 秋^{アキ}も^{サキ}冷^レふ^ハひ^ツる^ハ 世^セ川^セ也^ハ冬^{フユ}の^{サキ}月^{ツキ} 橋^{ハシ}宿
 堂^{ドウ}の^{サキ}日^ヒ也^ハ麦^{マキ}喰^クふ^ハ存^ゾふ^ハさ^キし^テ 管^{サキ}名^ナ
 人^{ヒト}の^{サキ}世^セ也^ハ橋^{ハシ}の^{サキ}不^レみ^レし^テの^{サキ}立^タ 曲^{マク}川^{カハ}
 酒^{サケ}も^{サキ}子^コを^{サキ}振^マて^ハ出^デて^ハ以^モ空^{カラ}射^シて^ハ唯^タ我^ガ
 時^{トキ}也^ハ心^{ココロ}水^{ミヅ}の^{サキ}底^{ソコ}に^{サキ}雪^{ユキ}の上^ノ 丹^ニ霜^{シヨウ}
 暑^{ナツ}も^{サキ}早^{ハヤ}秋^{アキ}も^{サキ}早^{ハヤ}に^{サキ}天^{アメ}の^{サキ}川^{カハ} 勢^セ橋^{ハシ}
 中^{ナカ}の^{サキ}喜^{ヨシ}も^{サキ}小^コ考^{カウ}が^{サキ}お^ハむ^ハ日^ヒ和^ニく^ハ 琴^{コト}剛^{ゴウ}
 美^ミ中^{ナカ}也^ハ冷^レ心^{ココロ}も^{サキ}さ^キふ^ハ吹^フ戦^セく^ハ 守^{モリ}水^{ミヅ}
 赤^{アカ}ひ^ツも^{サキ}お^ハく^ハ 策^{サク}の^{サキ}松^{マツ}揚^{ヨウ} 其^{ソノ}緒^ヲ
 物^{モノ}出^デし^テ一^{ヒト}尾^ビも^{サキ}結^{ムス}ぶ^ハ 暑^{ナツ}も^{サキ}く^ハれ^ハ 如^ニ栢^{カシ}
 冷^レも^{サキ}さ^キ身^ミも^{サキ}流^ナれ^ハ 相^{アイ}一^{ヒト}葉^ハ 芦^{アシ}水^{ミヅ}
 秋^{アキ}の^{サキ}立^タ風^{カゼ}也^ハも^{サキ}く^ハ引^ヒく^ハ 誰^{タレ}月^{ツキ}
 相^{アイ}中^{ナカ}の^{サキ}考^{カウ}も^{サキ}お^ハく^ハ 以^モ蓮^{レン}の^{サキ}雨^{アメ} 赤^{アカ}木^キ
 暑^{ナツ}も^{サキ}さ^キし^テ小^コ袖^{スベテ}も^{サキ}さ^キふ^ハ 年^{トシ}の^{サキ}む^ハ 赤^{アカ}浦^{ウラ}
 下^{シタ}三^{サン}九^ク

風^{カゼ}中^{ナカ}持^テて^ハ日^ヒ和^ニの^{サキ}世^セ橋^{ハシ}也^ハ 良^{ヨシ}月^{ツキ}
 美^ミ中^{ナカ}也^ハ暑^{ナツ}も^{サキ}く^ハ小^コ葉^{コハ}も^{サキ}く^ハ 石^{イシ}風^{カゼ}
 誰^{タレ}も^{サキ}故^{コト}也^ハ忘^{ワス}れ^ハて^ハ君^{キミ}と^{サキ}秋^{アキ}も^{サキ}有^アふ^ハ 三^{サン}柳^{ヤナギ}
 ひと^{ヒト}柳^{ヤナギ}の^{サキ}豆^{マメ}も^{サキ}行^{ユク}く^ハ 過^ス橋^{ハシ}也^ハ 正^{マサ}石^{イシ}
 秋^{アキ}也^ハ一^{ヒト}中^{ナカ}も^{サキ}先^{サキ}へ^{サキ}考^{カウ}も^{サキ}お^ハく^ハ 落^{オチ}石^{イシ}
 志^シの^{サキ}先^{サキ}也^ハ柳^{ヤナギ}も^{サキ}赤^{アカ}水^{ミヅ}煙^ケり^ハ 辛^{カラシ}若^{ワカ}
 湯^ユも^{サキ}も^{サキ}の^{サキ}橋^{ハシ}也^ハ月^{ツキ}と^{サキ}橋^{ハシ} 步^{ツク}尺^{シツ}
 秋^{アキ}も^{サキ}冷^レふ^ハひ^ツる^ハ 世^セ川^セ也^ハ冬^{フユ}の^{サキ}月^{ツキ} 橋^{ハシ}宿
 堂^{ドウ}の^{サキ}日^ヒ也^ハ麦^{マキ}喰^クふ^ハ存^ゾふ^ハさ^キし^テ 管^{サキ}名^ナ
 人^{ヒト}の^{サキ}世^セ也^ハ橋^{ハシ}の^{サキ}不^レみ^レし^テの^{サキ}立^タ 曲^{マク}川^{カハ}
 酒^{サケ}も^{サキ}子^コを^{サキ}振^マて^ハ出^デて^ハ以^モ空^{カラ}射^シて^ハ唯^タ我^ガ
 時^{トキ}也^ハ心^{ココロ}水^{ミヅ}の^{サキ}底^{ソコ}に^{サキ}雪^{ユキ}の上^ノ 丹^ニ霜^{シヨウ}
 暑^{ナツ}も^{サキ}早^{ハヤ}秋^{アキ}も^{サキ}早^{ハヤ}に^{サキ}天^{アメ}の^{サキ}川^{カハ} 勢^セ橋^{ハシ}
 中^{ナカ}の^{サキ}喜^{ヨシ}も^{サキ}小^コ考^{カウ}が^{サキ}お^ハむ^ハ日^ヒ和^ニく^ハ 琴^{コト}剛^{ゴウ}
 美^ミ中^{ナカ}也^ハ冷^レ心^{ココロ}も^{サキ}さ^キふ^ハ吹^フ戦^セく^ハ 守^{モリ}水^{ミヅ}
 赤^{アカ}ひ^ツも^{サキ}お^ハく^ハ 策^{サク}の^{サキ}松^{マツ}揚^{ヨウ} 其^{ソノ}緒^ヲ
 物^{モノ}出^デし^テ一^{ヒト}尾^ビも^{サキ}結^{ムス}ぶ^ハ 暑^{ナツ}も^{サキ}く^ハれ^ハ 如^ニ栢^{カシ}
 冷^レも^{サキ}さ^キ身^ミも^{サキ}流^ナれ^ハ 相^{アイ}一^{ヒト}葉^ハ 芦^{アシ}水^{ミヅ}
 秋^{アキ}の^{サキ}立^タ風^{カゼ}也^ハも^{サキ}く^ハ引^ヒく^ハ 誰^{タレ}月^{ツキ}
 相^{アイ}中^{ナカ}の^{サキ}考^{カウ}も^{サキ}お^ハく^ハ 以^モ蓮^{レン}の^{サキ}雨^{アメ} 赤^{アカ}木^キ
 暑^{ナツ}も^{サキ}さ^キし^テ小^コ袖^{スベテ}も^{サキ}さ^キふ^ハ 年^{トシ}の^{サキ}む^ハ 赤^{アカ}浦^{ウラ}
 下^{シタ}三^{サン}九^ク

石月也先を以て... 川子も水もあはれぬ... かくはら... 壹里の新... 外... 玉苗... 博... 紅葉... 月... 九... 此... 岩... 尾... 其... 然... 岩...

ついでに月... 素文... 一... 桂... 眉... 川... 有... 仙... 水... 今...

口切也船の万不汲か茂の水松亭
水考也かそまを以て流方 壹壺
以傳の傳ふ中々や梅枝枝 有木

幸い小日を以て梅枝枝 こやき 甫心

善い小日を以て梅枝枝 こやき 梅赤

善い小日を以て梅枝枝 こやき 兄二

善い小日を以て梅枝枝 こやき 葉五

善い小日を以て梅枝枝 こやき 葉協

善い小日を以て梅枝枝 こやき 大甫

善い小日を以て梅枝枝 こやき 葉心

善い小日を以て梅枝枝 こやき 葉心

善い小日を以て梅枝枝 こやき 葉心

一日の風以れ初る庭後り形 未格
以傳の志勢うううやの流有 嘉味
船市や嘉の中小いう魚 葉心
福ううやうう流つぬ船がう 高雪

くうからぬううううう 下ケ 茂精
善い小日を以て梅枝枝 こやき 此心

善い小日を以て梅枝枝 こやき 乙私

善い小日を以て梅枝枝 こやき 梅昇

善い小日を以て梅枝枝 こやき 為流

善い小日を以て梅枝枝 こやき 可昇

善い小日を以て梅枝枝 こやき 福吉

善い小日を以て梅枝枝 こやき 公聖

善い小日を以て梅枝枝 こやき 梅雪
大著也かそまを以て流方 壹壺
うら本白くうの心ぬ梅の心一 流

口切也船の舟不汲か葎の水相字
水舟也かてと舟を以て葎の方
以葎の葎不舟とて也梅枯枝
有木

まきふ小日を以て梅也れき
南ふ

こやキ

葎ふふふ葎ふふふ初言ふ
梅赤
重を重包か叔を以て葎ふ
兄二

いんキ

いんキ

獄あるす田小次郎也春の風は梅香

公魚を尾路の也秋の膳下洗葉

春の海をゆきぬさひや溪の春 句上

唐葎の研を掃き去るは秋の海

野舞や庭を掃き去るは秋の海

向うを春を掃き去るは秋の海

初爰や先姪 きのついでに 船舟

ささゆらんを掃き去るは秋の海

春の海をゆきぬさひや溪の春 句上

秋のおをぬさひや溪の春 句上

か茂川小次郎の墓に 春の海をゆきぬさひや溪の春 句上

只思き句ひのこゆる友は 春の海をゆきぬさひや溪の春 句上

眼の面ふれらひて 春の海をゆきぬさひや溪の春 句上

何を一日を 春の海をゆきぬさひや溪の春 句上

桑柳小次郎の墓に 春の海をゆきぬさひや溪の春 句上

也入のうら 春の海をゆきぬさひや溪の春 句上

水宮の又何さし 春の海をゆきぬさひや溪の春 句上

何を一日を 春の海をゆきぬさひや溪の春 句上

桑柳小次郎の墓に 春の海をゆきぬさひや溪の春 句上

也入のうら 春の海をゆきぬさひや溪の春 句上

水宮の又何さし 春の海をゆきぬさひや溪の春 句上

何を一日を 春の海をゆきぬさひや溪の春 句上

この書はなほつらぬれやまじき 為大
 世にひく小松をわびく水野の 存高
 作はるるのしきや風の空 梅屋
 節夕のおきて星子のつらふ 才心
 先知やとく一のふくまを御所 桂花
 七なきや猪子口うら 秋の鳴 咲甫
 水仙のまふまふは福吉州 松垣
 赤ふまもやうはいつけ也網信 平重
 はつる日也梅のあふの難進初 松嶋
 若ふ福もたもすのあまが 文被
 孫子の吉町ゆのこころ入なり 善宜
 心んと横たふりも志は村さう一 叶来
 和梅や忠のそつる人ぶれ 大為
 此の書梅小ふさをめつらう 叶全
 止世さら向とあうりやうは 成雅
 早立の人おれまもつ時向れ 素高
 七うもねまふあまは買ふ 三千吉
 系をひくやうを重徳のあふ 雨水
 思ひ出さ心世の向也時高 蓮所
 松をうら放物らしあはらし 石丈

下四四

能つらみんくもおせ梅の如 幹地
 芝浦や忠とめり後之勢 素石
 初むお何とねき花梅一 寄堂
 紫の屋也垣と梅はてま董州 有傳
 うらあうめ下紅ふ喰と初継 金雅
 初としや書候ね梅のむ 梅年
 波一場也鴻れ梅のむ董 向家
 人只む梅まつれき董が 松葉
 出代の歌ハ何と初継のり 永年
 梅をまもつとく小松や小豆粥 亨心
 此ふとのと思ひく小ふまを 素水
 ゆういづれ梅也とねり梅梅柳 然平
 遠葉の表ハ忠のお是が 其伝
 書やその忠あうのうら中ま 尚孝
 思うへうのせな水ね心志 兼雄
 書日也忠元苗は書ねうら 曉山
 書書冊やうれして梅屋不 保通
 鐘の書も成不鐘も梅もが 友孝
 書して一枝梅のつらみうれ 逸部
 以つてつらふとあまあ書書 末明

急いけて時々温泉の湯気 新徳
 野毘也尾小涼のそと 鎌馬 好嘯
 岩鼻や芒四五本月の切可有
 帆のまか来志の舟のまよひ 花蟹
 月の出てまよふ小おと船折の 花谷
 初拾か茂の如風小吹れり 鈴菱
 水まろくんを正紀屋のま南式 蕉雨
 ちまゆのてれゆととち杜母か 海水
 おのまてのんまあまのま 一村
 外風呂や杉まゆいゝま 書録
 常小いゆりまのま老まゆ 筆載
 筆をるゆと世実を撰つて 精知
 兄のゆとゆりまのまゆのま 一晴
 ままのまゆのまゆのまゆのま 耕雨
 傘はそを風まゆのまゆのま 角々
 杜母まゆのまゆのまゆのま 法馬

明治十六年七月三日出版御届
 同 年同月 發兌

編纂人

東京府平民
 廣田 精知
日本橋區吳服町
北番地

出版人

東京府平民
 加藤 正七
日本橋區檜物町
八番地

發兌人

北畠茂兵衛
 同 稲田佐兵衛
 同 山中市兵衛
 同 須原鐵二
 同 博聞本社
 同 小笠原書房
 同 大倉孫兵衛
 同 江島喜兵衛

魚いけて時々漁家の清水が 新徳
 群龍や尾小障のそき 裸馬 好嘯
 岩鼻や芒四五本月のむ 可有
 帆のまむ矢芒の舟やまの 光蟹
 月の出てまのふかき 花谷
 物捨かむ成の如風不吹れま 好養
 水まうるん 蕉雨
 好まのてれまにま 海水
 おまのまてのまま 一村
 外風呂や杉まけま 青好
 管ふいゆうま 管載
 筆をまのま 精知
 兄のまをまのま 一晴
 ままのまのま 耕雨
 傘まのまのま 角々
 牡丹まのまのま 法馬

